

2003年度 事業の概要

<p>1 調査と研究 26</p> <p>飛鳥藤原京の発掘調査 26</p> <p>平城京の発掘調査 26</p> <p>文化遺産研究部の研究活動 28</p> <p> ●建造物研究室の調査と研究 28</p> <p> ●歴史研究室の調査と研究 28</p> <p> ●遺跡研究室の調査と研究 29</p> <p>埋蔵文化財センターの研究活動 29</p> <p> ●遺物調査技術研究室 29</p> <p> ●遺跡調査技術研究室の調査と研究 30</p> <p> ●古環境研究室の調査と研究 30</p> <p> ●保存修復科学研究室の調査と研究 31</p> <p> ●保存修復工学研究室の調査と研究 32</p> <p> ●文化財情報研究室の調査と研究 32</p> <p> ●国際遺跡研究室の調査と研究 32</p> <p>国際学術交流 33</p> <p> ●中国社会科学院考古研究所との共同研究 33</p> <p> ●遼寧省文物考古研究所との共同研究 34</p> <p> ●河南省文物考古研究所との共同研究 34</p> <p> ●韓国国立文化財研究所との共同研究 34</p> <p> ●アフガニスタン文化遺産保存修復のための 緊急協力事業 34</p> <p> ●異なる気象条件下における不動産文化財の 発掘技術及び保存に関する調査研究 35</p> <p>海外からの主要訪問者一覧 36</p> <p>海外からの招聘者一覧 36</p> <p>海外渡航一覧 37</p> <p>発掘調査現地説明会 39</p> <p>公開講演会 40</p> <p> 第92回公開講演会 40</p> <p> 第93回公開講演会 40</p>	<p>研究集会 41</p> <p>文部科学省科学研究費助成研究 42</p> <p>学会・研究会等の活動 46</p> <p>文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への 指導・助言・協力等 47</p> <p> ●平城宮跡の整備 47</p> <p> ●キトラ古墳の予備調査 47</p> <p>2 研修・指導と教育 49</p> <p>埋蔵文化財センターの研修と指導 49</p> <p>京都大学大学院の教育 49</p> <p>奈良女子大学大学院の教育 49</p> <p>3 展示と公開 51</p> <p>飛鳥資料館の展示 51</p> <p>平城宮跡資料館の展示 51</p> <p>解説ボランティア事業 52</p> <p>図書資料・データベースの公開 52</p> <p>4 その他 53</p> <p>刊行物・データベース等 53</p> <p>人事異動 56</p> <p>予算等 57</p>
---	--

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、2003年度に計14件・5458㎡の発掘・立会調査を実施した。うち、藤原宮の調査が5件・2335㎡、藤原京の調査が1件・1963㎡、飛鳥地域等の調査が8件・1160㎡である。以下、主な調査について概要を述べる。

藤原宮の第128次調査では、①朝堂院南北規模の確定、②朝集殿院区画施設および朝堂院回廊との接続部の様相の解明を目的に調査をおこなった。その結果、朝堂院回廊東南隅を検出し、朝堂院南北規模の復原のためのデータを得た。また朝集殿院を区画する施設を確認し、掘立柱塀から礎石建ちの複廊へ建て替えられたことも明らかとなった。さらに、朝堂院回廊との接続部分の様相も判明した。第132次調査は、朝堂院東第三堂南半と東面回廊を対象とした。戦前におこなわれた日本古文化研究所の調査では、東第三堂は切妻造南北棟建物で、桁行15間（柱間14尺等間）、梁行4間（柱間10尺等間）の総柱建物と報告されている。本次調査の3月末段階での所見では、建物規模については古文化研究所の想定どおりであるが、梁行の柱間については、身舎が10尺で、底部分については9尺であると考えている。また平安時代の建物も検出し、付近に存在した荘園の管理施設である可能性がある。

第131次調査地は、藤原京左京六条二坊にあたる。藤原宮期の遺構は後世の開削のため確認できなかったが、径20m前後の円墳3基を近接した状況で検出した。墳丘は藤原京造営時に削平されたと考えられるが、残存する周壕内から多数の埴輪・須恵器が出土した。古墳の造営年代は2基が6世紀前半、1基が5世紀前半と考えられる。それ以外は、中世の村落と関係するとみられる井戸を多数検出した。

飛鳥地域の調査としては石神遺跡（第129次調査）、川原寺（第119-5次調査）、キトラ古墳（第130次）がある。石神遺跡の調査では、昨年度の調査で検出した天武朝の池状遺構および藤原宮期の南北溝・石敷遺構に続く部分を検出した。昨年同様、両遺構からは天武朝を中心とする多数の木簡や多様な木製品が出土した。木簡の内容は仕丁に関係するものや、「三川」地域からの荷札木簡が多い。川原寺の調査では、川原寺北面大垣を検出し、寺域の南北規模が3町であることが確定

した。また、北面大垣に接する寺域北部で、多数の工房関係遺構を検出した。工房の操業時期は川原寺創建期（7世紀後半）～平安時代に及ぶ。鉄・銅・銀などの金属加工、瓦、ガラス製品、漆製品の生産がおこなわれており、川原寺の造営や修繕にともなう寺院工房と推定される。このほか、鉄釜の大型鑄造土坑を検出した。大型の鑄鉄遺構としては最古のものであり、古代の鉄釜製作技術を解明する上で重要なデータといえる。キトラ古墳については本概要別項を参照されたい。

なお、発掘調査にともなう現地説明会と現地見学会を実施した。実施年月日、担当者は以下のとおりである。

飛鳥藤原第119-5次（川原寺寺域北限）

2003年 9月9・10日 現地見学会

飛鳥藤原第128次（藤原宮朝堂院東南隅）

2003年 6月21日 箱崎 和久

飛鳥藤原第129次（石神遺跡）

2003年11月22日 内田 和伸・市 大樹・竹内 亮

飛鳥藤原第132次（藤原宮朝堂院東第三堂および東面回廊）

2004年 3月20日 市 大樹

平城京の発掘調査

平城宮跡発掘調査部が2003年度に実施した発掘調査は、平城宮跡3件、平城京跡11件の計14件である。以下、主要な調査成果について概要を述べる。

平城宮朝集殿院（中央区朝堂院の南には朝集殿院が確認されていないので、朝集殿院といえは東区朝堂院の南にあるこの地区をさす）の発掘調査（第355次）は、2001年度の第326次調査に始まる同地区の一連の調査としてなされたもので、昨年度の第346次調査に一部重複して実施された。今回はとくに朝集殿院の内庭部と、回廊や掘立柱塀などの区画（閉塞）施設の構造の把握を目的としておこなった。内庭部分では第48次調査区の南側に接して未発掘区を広く掘ったが、奈良時代の遺構はまったく確認できず、北東から南西に流れる古墳時代の流路が確認されたにすぎない。これに対して、まず、殿院の南面を画する東西方向区画施設は、掘立柱塀が同位置で築地塀に建替えられ、しかもその間に、より簡易な構造の掘立柱塀が一時建てられていたことがわかった。一方、東面では後半期の朝

堂院地区から一直線上に伸びてくる築地回廊の下層には遺構がなく、15小尺外側の位置に、掘立柱塀があることがはじめて判明した。これらの成果により、平城宮朝集殿院の区画施設に関する大きな知見が得られ、平城宮の造営計画に関する基本的なデータが追加された。

平城宮第一次大極殿院南面回廊の調査（第360次）は、2002年度に第337次調査として実施された西樓の調査区と、1998年度に第296次調査として実施された院西南隅の調査区に挟まれた部分に対して調査をおこなったもので、現在進行している当地区の整備に先立ち、当該エリアの基本的情報を増加させることが目的であった。そして、南面築地回廊についての最終の調査でもあった。それにより、築地回廊北側の大極殿院内庭および南側の朝堂院内庭に関する知見が大幅に増加した。まず、大極殿院内庭に関しては、時代が下るにつれてレベルを上げてくる三層の礫敷各面を過去の調査同様ここでも確認できたが、中層礫敷以後、西樓に向かって広場上面がなだらかに上昇していく事実が明らかになった。さらに上層、中層ともにそれともなう雨落溝際の見切石列が確認できた。また、朝堂院内庭については、2面の礫敷を確認できたが、これまで時代が中世に下ることが考えられていたそれらの礫敷が、奈良時代に遡る可能性が高まった。これらは、礫敷の層位的発掘を試みた成果であるといえる。

2003年度最後の宮跡の調査（第367次）は、中央区朝堂院の広場に対しておこなわれた。成果の詳細については次年度の紀要にまとめる予定だが、ここでは4棟の掘立柱建物が検出され、それから窺われる全体の建物配置が東区朝堂院で見ついている大嘗宮の建物群と一致し、かつ、柱穴から出土した瓦の年代観から、それが765年（天平神護元）におこなわれた称徳天皇重祚の際の大嘗宮であることが推定された。また、これらの遺構の下層から、下ツ道の両側溝も確認された。これは朱雀門の下でも確認されているもので、この遺構についてのこれまでに最も北での確認ということになる。

京の調査のうち、旧大乘院庭園の発掘調査（第365次）は、現在庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受け、復原整備のための資料を得る目的で1995年から毎年おこなってきた一連の調査に属するものである。今次は主として東大池の西北隅と西南

隅の2箇所を発掘し、中世以前から近代にいたる各時期の遺構を把握した。西北隅では、東大池の中世堆積土の上に、中世後半以後の三層の遺構面を確認し、そのうち中間層の段階が『四季真景図』、そして上層面が『大乘院殿境内図』に描かれているものにそれぞれ対応するという所見が導き出された。これは、これまで絵画の技法から想定されてきた両絵図の時期比定とは正反対のものである。西南隅では、積土の下に入江状の洲浜が部分的に確認され、それが元興寺禅定院の庭園遺構である可能性が出てきた。また、それ以後の積土が長期になされた結果、現状のような比較的急勾配の岸辺となっているわけだが、それを切る暗渠の土管が明治5年製であることから最上層の積土は近世であろうと推定されるにいたった。

法華寺の調査（第363次）は境内全域に対する防災施設改修事業に先立つ事前調査で、基本的に幅1mのトレンチ調査であったが、現境内全域に対して実施されたことにより、当地区の古代以後の変遷を示す多くの遺構をみつけることができた。なお、現本堂の南に位置する池部分に対しておこなわれた調査（第366次）は護摩堂建設にともなう小規模なものである。調査により、まず、現境内地には規則的な配置をもつ6棟の東西建物群が存在していることが明らかになった。これらは確認できた範囲からすれば掘立柱建物から礎石建物へ建替えられたと判断された。また、それらの北方にさらに基壇建物が存在することも新たに判明した。このほか、法華寺創建期の講堂及びその先行建物や中世の環濠状遺構なども確認された。

以上の主要な調査の詳細やそれらと併行しておこなった小規模調査の内容については『奈良文化財研究所紀要2004』を参照されたい。

発掘調査にともない実施した現地説明会は以下のとおりである。

平城第355次調査（平城宮朝集殿院）

2003年 6月14日 山本 紀子

平城第360次調査（平城宮第一次大極殿院南面回廊）

2003年 8月23日 山本 崇

平城第365次調査（旧大乘院庭園）

2003年11月15日 金井 健

平城第367次調査（平城宮第一次朝堂院）

2004年 3月27日 金田 明大

文化遺産研究部の研究活動

当研究部を構成する建造物研究室、歴史研究室、遺跡研究室では、各研究室の個別テーマによる調査研究を継続的におこなうとともに、共同で南都寺院の歴史的景観に関する研究として唐招提寺を対象に取り組んでいる。

●建造物研究室の調査と研究

歴史的建造物・伝統的建造物群の調査研究

現存建築・古材・遺構・遺物などの現物資料を中心に据えて古建築及び伝統的建造物の調査研究を進めている。

重要文化財長谷寺本堂（奈良県）の建造物調査をおこない、報告書を刊行した。当本堂に対する本格的な詳細調査は初の試みであり、必ずしも明確でなかった特異な平面や構造形式の成り立ちと慶安3年（1650）再興の経緯などを明らかにした。

長野県榑川村からの受託研究として平沢地区の伝統的建造物群保存対策調査（2004年度まで継続）、および旧奈良井宿の原家住宅、旧贄川宿の深澤家住宅の建造物調査をおこなった。また、岡山県成羽町からの受託研究として吹屋の片山家住宅の建造物調査をおこなった。建造物調査では各住宅毎に報告書を取りまとめた。

木造建造物の保存修復に関する調査研究

1998年度からの7カ年計画で進めているプロジェクトであり、多様化する文化財建造物の保存修復に対処する新たな体制と組織を検討すること、過去の事例を検証しながら今後の保存修復のあるべき考え方、方法を探ること、保存事業に伴い蓄積された学術資料を再評価してその保存活用方法を探ることなどを目的とする。2003年度は保存図目録、乾板写真目録、現状変更説明を刊行した。

平城宮建物の復元的研究

大極殿院東西楼の基本設計に必要な資料を得るために、小屋構造の類例調査、簡易構造模型の製作、韓国建築の小屋構造に関する資料の収集及び研究会の開催をおこなった。また、大極殿の屋根仕様に関する研究会を開催した。

その他

文化庁によるアジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業として実施されるベトナム・ドンラム村

の保存計画策定調査への協力要請を受けて、その準備作業に着手した。その他、全国各地で実施されている文化財建造物等の修理事業・遺跡整備事業に関わる修理・復原・整備等に対して援助・助言した。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では世界文化遺産に登録されている南都の寺社所蔵の書跡資料について継続的に調査研究をおこない、また奈文研所蔵の歴史資料の研究をおこなっている。

本年度の南都寺院の調査は、興福寺、薬師寺、唐招提寺、東大寺所蔵の書跡資料についておこなった。興福寺調査は、聖教文書箱が80合以上所蔵されているうち、目録が未刊行の第61函以降の分につき、補足の調査・写真撮影をおこない、第70函までの分の目録を『興福寺典籍文書目録第三巻』として刊行した。当初は第80函までで一冊の目録とする予定であったが、量的に収録しきれず分冊とした。内容的には、鎌倉時代後期の紙背文書のある論義草や江戸時代の維摩会関係文書などが量的に多い。なお良尊筆といわれる大般若経600帖を収める第68函分は今回は除いた。あわせて第81函以降の分についても、目録データを作成しつつある。

薬師寺調査は、第29函にあたる箆筒収納分を調査中である。江戸時代の「公文所日記」や「年中毎日之記」などの冊子や年貢関係の文書を多く収納し、江戸時代の薬師寺の状態を知る格好な史料である。現在第23函分を撮影している。唐招提寺関係では、寺内惣倉に収蔵する明治以降の書類の調査とともに、奈良県立図書館所蔵の唐招提寺関係史料の翻刻をおこなった。科研費も活用した東大寺所蔵の未整理聖教文書の調査は、今年度12函分の目録データを入力した。江戸時代の年預関係文書、周辺所領関係文書などが多くを占めるが、平安・鎌倉期の文書や経巻類の発見もある。一例として、『奈文研紀要2004』に長治元年の美作国封戸結解状断簡等を紹介した。

その他の寺院では、寺側の調査協力の依頼を受け、京都仁和寺御経蔵聖教調査、滋賀石山寺聖教調査や京都府教委依頼の神護寺聖教調査、奈良市教委依頼の氷室神社大宮家文書調査、奈良吉野町教委依頼の上田家文書調査等に協力をした。

また奈文研所蔵の資料については、継続して調査撮影等の業務をおこなっているが、そのうち北浦定政関係資料に関して、「松の落ち葉」を昨年度に引き続き

影印および文字部分翻刻して、『北浦定政関係資料松の落ち葉二』として刊行した。これで北浦定政作成の野帳「松の落ち葉」五冊の紹介を終えたことになる。また関野貞関係資料については、『奈文研紀要2003』に概要を報告した。明治30年代前半の日記や調査野帳、図面類などが含まれる。

なお北浦定政関係資料は、2004年3月に飛鳥資料館でおこなわれた「重要文化財指定記念展」に展示されたが、その展示およびパンフレット作成に協力をした。

● 遺跡研究室の調査と研究

遺跡研究室は2001年4月発足の文化遺産研究部に新設された研究室である。遺跡整備に関する調査研究と、庭園史に関する調査研究が当研究室の二本柱となる。

遺跡整備に関する調査研究として、整備後の遺跡の活用に対する関心が急速に高まっている現状に鑑み、中期計画では全国各地の大規模遺跡の整備・活用・管理に関する情報収集・調査・分析をとりあげた。計画は5ヶ年で、全国の対象遺跡の現地調査を順次おこない、最終的には報告書を作成することとしている。3年目にあたる2003年度は一乗谷朝倉氏遺構（福井県福井市）など北陸地方の10ヶ所と安土城跡（滋賀県安土町）など近畿地方の10ヶ所等、計32ヶ所の遺跡を調査した。現地調査のとりまとめは（a）整備手法・技術、（b）維持管理、（c）学習施設としての活用、（d）観光資源としての活用、（e）オープンスペースとしての活用、（f）地域の文化施設としての活用、の六つの観点から現状と課題を整理した。整備後の活用、管理が適切になされるためには整備段階から活用、管理についての綿密な計画を立てる必要があること、担当者をはじめとして自治体の熱意、力量によるところが大きいことなどが明らかになった。なお、研究で得られた成果については、必要に応じて各遺跡にフィードバックすることとしており、当研究室がこの分野における情報センターの役割を担うものと考えている。

庭園史に関する調査研究として、中期計画では日本の古代庭園を対象として文献史料、発掘調査資料、遺跡現地における地形・水系調査などに基づく多角的な研究を設定した。個々の庭園の形態、技術などを明かにすることによって、庭園の源流、成立過程、変遷を解明することを期している。2003年度は奈良時代の庭園遺構をとりあげ、その特色と機能を中心に分析検討した。

対象とした遺構は、平城宮東院庭園（奈良県奈良市）、周防国府（山口県防府市）など15ヶ所である。これらの遺構の形態的特色、技術などは明かにすることができたが、庭園遺構の機能、使われ方については不透明な部分が残った。2004年度以降さらに検討を加えたいと考えている。また、発掘調査された古代～近代の庭園遺跡に関する資料収集とデータベース化も中期計画で設定した庭園に関する研究項目であるが、これまでに307件の発掘庭園の所在地・時代・構成要素などの基本項目を和文・英文でデータベース化し、当研究所のホームページ上で公開している。英文データベースの公開は当研究所での最初の事例である。画像データの追加が今後の課題となっている。

この他、地方公共団体がおこなっている遺跡の整備事業や庭園の保存修理事業に関する指導、助言も当研究室の重要な役割であり、2003年度は篠山城跡（兵庫県篠山市）、大乘院庭園（奈良県奈良市）をはじめ49か所の史跡等についておこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは7研究室からなり、それぞれの研究課題に取り組んでいるのは言うまでもなく、全国の埋蔵文化財担当者に対し、埋蔵文化財の調査や保存、遺跡保存や整備に関する研修を年間を通して開催している。また、地方公共団体や関係機関の求めに応じて、各地でおこなわれる発掘調査や保存事業について、専門的・技術的立場から指導と協力をおこなっている。

● 遺物調査技術研究室

2003年度より本研究室は人事異動に伴って、旧古環境研究室がおこなっていた環境考古部門の業務を遂行することになった。本年度の受託事業は大阪市内遺跡、特に大坂城下町および、神戸市兵庫津遺跡出土の動物遺存体の同定及び考察であった。その他に前年度より継続している韓国釜山大学の発掘した金海会峴里貝塚出土の動物遺存体の報告書執筆、高知県土佐市居徳遺跡出土動物遺存体の同定、および報告書の執筆がある。

学会発表は、2003年9月に青森県奥入瀬で開催された第16回国際環境生物地球化学シンポジウム（ISEB16）で研究発表をおこない、同じ9月に英国ダ

ーリントンで開催された「ブタと人類, Pigs and Humans」において研究発表をおこなった。

大坂城関連の動物遺存体には、大坂城下層(豊臣期～江戸初期)の魚市場、薬種問屋、町屋からのものが含まれ、食用だけでなく、薬用、骨細工などの多種にわたる動物利用の一端を明らかにできた。

兵庫津遺跡からは神戸港の前身である開港以前の近世、兵庫津から発掘された魚類遺存体が多数出土した。特筆できるのは以前、これまでに報告を担当した広島県福山市の草戸千軒町遺跡、岡山城本丸などと比べて、出土した魚種が多様で、特にマダイが小さい固体に集中する傾向が見られたことである。これは近世に生じた人口増加に対応して需要を満たすために、従来漁獲対象とならなかった小魚まで捕獲したと考えられる。その背景には魚撈技術の進歩と、水産物の流通機構が整備されたことを明らかにできた。中世までの網漁法は、比較的大型の魚種を対照としていたが、近世になって魚種が小型化する現象は、漁網の目のサイズが小さくなったことを示し、それに伴う水の抵抗増加を解決できる網漁法の発達があったことを推定できた。

受託事業以外では、高知県土佐市の居徳遺跡、兵庫県尼崎市大物遺跡出土の動物遺存体の同定及び考察がある。

現生骨格標本の収集に関しては、3月に鹿児島県出水市立ツル博物館より、ナベヅル、マナヅルなど4個体の現生標本の提供を受け、現在、成骨中である。

●遺跡調査技術研究室の調査と研究

当研究室では、第一に、古代官衙遺跡の発掘調査・研究や遺跡の保存活用に資するため、官衙遺跡発掘調査法の研究を実施している。この研究では、昨年度刊行の『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』の続編として、各種の官衙遺跡の発掘調査や出土遺物の調査に際して手引き書としても活用できることを意図して、研究成果の一部を『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』として編集・刊行した。この報告書では、官衙関係遺物の特徴や資料調査法、宮都や国府・郡衙・駅家・城柵・山城・末端官衙遺跡など各種の官衙遺跡調査研究の現状や発掘調査法についてまとめた。

第二に、古代官衙遺跡とともに、各地の古代集落・寺院・豪族居宅遺跡等の発掘調査資料を収集・整理し、適宜公開を目指して、データベース作成作業を実

施している。このうち、遺跡の性格・所在地・文献目録からなるデータ一覧は、インターネットで順次更新・公開しているが、昨年度からは官衙遺跡の所在地図や遺構配置図、建物遺構の実測図などの画像データや建物遺構の諸属性についてもデータ入力しており、数年以内に公開できるよう、データベース構造の改造なども進めている。

第三に、昨年度は鳥取県気高町の指導依頼を受け、上原遺跡群(因幡国気多郡衙・寺院)の発掘調査報告書を刊行したが、官衙と周辺寺院との関係や、地方行政と領域の問題を研究する一つのケーススタディとして上原遺跡群の瓦類と検出遺構を主にとりあげ、隣接する鹿野町寺内廃寺などの出土瓦の調査成果も踏まえながら、遺物の製作技法・型式・編年、および郡衙周辺寺院の性格、郡と領域の問題について研究を継続している。

第四に、古代官衙と集落に関する研究集会を開催した。2003年度は、「駅家と在地社会」をテーマとし、駅家の構造、駅家と在地社会との関係、伝馬制と駅制に関する問題などをめぐって研究報告と討議をおこなった。

第五に、各地の公共団体からの依頼により、全国の官衙・寺院遺跡等の発掘調査、遺跡の保存整備活用等について指導助言をおこなっている。

●古環境研究室の調査と研究

考古学関連

福岡県から青森県にかけて19都府県下の32遺跡から出土した木材を年代測定の対象とした。注目すべき調査結果としては、石川県八日市地方遺跡出土の木棺材(小口板-辺材なし)の年輪年代が297B.C.と判明した他、大阪府和泉市府中遺跡出土板材(辺材有り)の312A.D.、兵庫県尼崎市東園田遺跡出土木材(杭-辺材未確認)の181A.D.、大阪府瓜生堂遺跡出土木棺(底板-辺材なし)の436B.C.などは弥生・古墳時代の年代を考えると重要な年代情報を提供することができた。

古建築関連

奈良県(法隆寺金堂、唐招提寺金堂)、京都府(宇治上神社本殿、宇治上神社拜殿、平等院鳳凰堂)、大阪府(錦織神社)に所在する6件の古建築部材の年代測定をおこなった。もっとも注目すべき成果は、京都府宇治市に所在する国宝宇治上神社本殿の右殿・中殿・左殿の3殿がいずれも1060年頃の平安時代後期初

頭に建てられたものであることが判明し、現存する日本最古の神社建築であることが証明された。この成果が、建築史に与えた影響は大きい。

美術品関連

奈良県国宝唐招提寺金堂に安置されている国宝乾漆慮舎那仏坐像、国宝木心乾漆千手観音立像、国宝木造帝釈天像の各部材について年代調査を実施した。年代が確定したものもあるが、いずれも部材そのものに明瞭な辺材部が残存しているものがなかったため、仏像の製作年代にせまるような年輪年代は得られなかった。

自然災害関連

神奈川県茅ヶ崎市にある国史跡旧相模川橋脚のうち、8本の橋脚（いずれも辺材未確認）について年輪年代調査をおこなった結果、1260年以降のものであることが確定した。また、長野県南信濃村の遠山川河川敷に露出している埋没ヒノキは714年に枯死したものであることが判明した。これは、平安末期の歴史書『扶桑略記』や奈良時代の歴史書『続日本紀』に記されている遠江地震（前者の文献では714年、後者の文献では715年と異なる）の生き証人である可能性がきわめて高いことを裏付ける結果となった。

年輪画像計測システムの開発

デジタルカメラやスキャナ等で撮影した年輪の画像から、年輪幅の計測をおこなう専用の画像計測ソフトを開発している。現地で試料表面の詳細な年輪幅を撮影し、コンピュータ上で年輪幅の計測をおこなうというこの方法は、従来の年輪読取器では扱えないような大型の木製品試料や現に建っている建造物などの年輪年代調査に威力を発揮する。上記の宇治上神社本殿および拝殿、錦織神社などの年輪年代調査は、このシステムを用いて得られた研究成果である。



宇治上神社本殿での年輪年代調査風景

● 保存修復科学研究所の調査と研究

保存修復科学研究所では、出土遺物および遺構の保存科学的研究ならびに保存修復に関する開発研究を進めている。以下に2003年度において取り組んだ内容を概観する。

奈良文化財研究所の発掘調査で出土した遺物（木製品、木簡、鉄製品、金銅製品）に対して材質・構造調査を実施し、保存処理をおこなった。この他、他機関との共同研究として以下の調査研究を実施した。1) 固着した状態で出土した緡銭をX線CT法で丹念にスライス画像を取得することにより、緡銭の形態を保ったまま非破壊で銭種を判別することができた（長岡京市埋文）。2) 南茅部町で火災により焼損した垣ノ島B遺跡出土漆製品に対して材質・構造調査を実施し、漆成分および赤色顔料がある程度残存していることを明らかにした（北海道教委、南茅部町教委）。3) 北海道縄文時代漆工技術の重要な手がかりとなるカリンバ4遺跡より出土した漆製品の材質・構造調査をおこない、その構造的な特徴および製作技法について多くの知見を得ることができた（恵庭市教委）。

開発的な研究としては、有機質遺物の保存処理における強化薬剤の浸透性の向上とより安定した形状保持を目的に、継続して超臨界流体二酸化炭素を用いた保存処理法の開発に取り組んだ。また、文化財資料の非破壊非接触の材質判定分析技術を開発することを目的として、これまで実験室に運び込むことのできなかったもの、発掘直後あるいは発掘現場における遺物などに対しても、フィールドにおいて迅速かつ精度の高い材質分析が可能となる携帯型レーザーラマン分光分析装置を作製し、基礎データの蓄積と文化財資料のラマンスペクトルの測定をおこなった。

この他、受託事業として重要文化財加茂岩倉遺跡出土品の事前調査（文化庁）、重要文化財加茂岩倉遺跡出土品の保存修理（文化庁）、重要文化財平原遺跡出土品の事前調査（文化庁）、重要文化財平原遺跡出土品の保存修理（文化庁）、京都市鹿苑寺出土修羅の保存修理（京都市埋文）、安芸国分寺跡出土木簡の総合的調査（東広島市）、妻木晩田遺跡土質遺構露出展示技法の研究（鳥取県）、古代土塁（石垣）遺構の保存整備手法の研究（総社市）、青谷上寺地遺跡出土遺物の顔料調査（鳥取県）などをおこなった。

また、中国より古代壁画の調査研究および保存修理

に取り組んでいる研究者を招聘し、「日中における古代壁画の保存修復」をテーマに保存科学研究集会を開催した。

●保存修復工学研究室の調査と研究

当研究室では、今年度は「遺跡の保存工学的研究」として「遺跡の斜面保護」を対象とした。遺跡における斜面は、墳丘や土塁などのような「遺構としてののり面（人工斜面）」及び遺構と直接的な関係をもたない「遺跡内地形としての斜面（自然斜面及びのり面）」に分類できる。前者の保護が遺跡の保存と本質的にかかわることは言うまでもないが、後者の保護も遺跡の保存ならびに景観保全上きわめて重要である。この研究では、「遺構としてののり面」と「遺跡内地形としての斜面」の特性を抽出し、その保護における基本的な考え方をまとめたうえで、各種斜面保護工法の適用について取り扱った。さらに、これまでの各種事例の情報収集もおこなった。これらの成果は、公表できる段階にはいたっていないが、「遺跡の斜面保護（稿）」として取りまとめた。遺跡保存整備の理念に基づいた包括的な斜面保護に関する研究はこれまでおこなわれておらず、研究の継続、発展とともに、成果の公表も視野にいたい。こうした研究のほか、2003年度には、埋蔵文化財発掘技術者専門研修「城郭調査過程」を担当した。この過程は、定員を大きく上回る受講者の参加があり、城郭分野に対する地方公共団体の関心の大きさを示した。

●文化財情報研究室の調査と研究

文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、所外の研究状況についての情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。10月には地理情報システム学会大会において、「遺跡内分析における高細精空中写真画像の可能性」「遺跡の階層性と位置表現」と題して、遺跡GISに関する資料の活用や遺跡の認識における基礎的問題について研究成果を発表した。また、遺跡地図情報システム研究会、及び、遺跡情報管理検討会を開催し、遺跡研究に対するGISの応用等についての研究報告、報告書抄録データベースに関する意見交換をおこなった。

文化財情報の電子化として、木簡、図書、全文、写

真、遺跡、航空写真、軒瓦などのデータベースにおいて、データの更新ならびに追加入力をおこないデータの充実に努めた。データベースへのデータ入力に際しては、事前のデータ整理が大切であるため、各種文献や参考書目の調査等をおこないながらデータの拡充をおこなった。また、いくつかのデータベースにおいてはプログラムの細部の改良をおこなった。写真データベースの基礎となる写真の電子化に関しては35mm、ブローニ、4×5、ガラス乾板について電子化を継続しておこなった。航空写真データベースにおいては、入力の元となる原フィルムからのマイクロフィルムの作成、マイクロフィルムからの電子画像の作成を継続しておこなった。

●国際遺跡研究室の調査と研究

国際遺跡研究室は、研究所が主催する国際共同研究事業を円滑に実施するための調整と外国からの訪問者に対する対応が主たる業務であり、業務課と連携しておこなっている。

2003年度には、共同研究で招聘した外国人研究者は29名、施設見学や表敬訪問で研究所を訪れた外国人研究者は、10カ国44名であり、SARSの影響で、訪問者は昨年度より大幅に減少している。一方、科学研究費、招聘、共同研究費による研究所員の渡航件数は76件で、そのうち共同研究による渡航は29件であった。

また、埋蔵文化財センターでは、国際協力事業団・日本国際協力センターなどの要請により、他機関が招聘した外国人に対しても研修事業をおこなっているが、当研究室では研修内容や講師の選定などもコーディネートしている。2003年度には3件あり、合計26人に対し研修授業をおこなった。

これらの国際関係業務の他に、2003年度には埋蔵文化財発掘技術者専門研修『陶磁器調査課程』を担当し、他の研修授業の講師を務めた。また、当研究室は、山内清男資料の保管並びに資料閲覧希望者への対応の任務があり、2003年度には10名が資料を閲覧した。本年度の当研究室関係の出版物は、『山内清男考古資料14』奈良文化財研究所史料第66冊である。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国・韓国・カンボジア・チリの4カ国の研究機関と以下のような共同研究を実施している。2003年度の中国との共同研究は、中国各地に蔓延した新型流行性肺炎の影響で研究計画を大きく変更する事になった。当初は本年度の共同研究の実施自体も危ぶまれたが、幸いなことに肺炎は8月に終息した事により、各プロジェクトは年次計画を大幅に変更して、何とか当初の目的を達成する事ができた。散々の1年であったが、研究所にとって喜ばしい朗報ももたらされた。町田章所長が、中国社会科学院の名誉教授称号を授与された事である。これまでの町田所長の長年にわたる中国考古学研究成果が、日本はもとより中国でも高い評価を受けた事が最大の受賞理由であるが、中国社会科学院考古研究所長劉慶柱氏の談によると、奈良国立文化財研究所時代から代々の所長の下で現町田所長中心に苦労を重ね地道に取り組んで来た中国との交流成果ももう一つの受賞理由であると云う。これを機会に、両国間でより一層質の高い共同研究が進められ、多大な成果を達成できるのではないだろうか。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

両研究所は、2001年度より5ヵ年計画で唐長安城大明宮太液池遺跡の共同発掘調査を行っている。太液池は、蓬莱池とも呼ばれ、大明宮北部中央に位置する。これまでの試掘調査・発掘調査・ボーリング調査によって、平面は扁楕円形を呈し、東西最大長484m、南北最大長310m、面積17万㎡の壮大な規模を誇る園地であることが知られている。2003年度には、春と秋の2回発掘調査を実施した。

春には、池北西部の半島部と池中央東寄りにある蓬莱島南岸部の二箇所に発掘区を設定し、本格的な調査をおこなった。残念ながら日本側研究者は、中国で新型流行性肺炎が蔓延したため、この調査には参加できなかった。

池北西半島部の調査区では、「干欄式建物」と呼ばれる極めて珍しい構造の建物跡が発見され、注目を浴びている。蓬莱島南岸の調査区では、平城宮東院庭園跡でもみられる護岸石積み、砂州、景石の他、磚積み

擁壁の小池、玉石積みの小池、玉石溝、建築基壇、道路遺構など遺構を検出し、初めて蓬莱島岸辺の様子が明らかになった。詳細を知りたい方は、考古雑誌社出版の『考古2003年11期』（中文）と『奈良文化財研究所紀要2004』をご覧頂きたい。

秋期の調査は、太液池南岸の一段高くなった高台部を対象に実施しているが、凍結など遺構に悪影響を与える季節に入るため、遺構面直上まで掘り下げた後、一旦調査を中断し、2月後半から調査を再開する事になっている。

研究員交流に関しては、9月から10月にかけて、安家瑤女史を団長とする5名の研究者を招聘し共同研究をおこなった。また、訪日の機会を利用して、一般聴衆を対象とする公開講演を開催した。安家瑤女史には「唐長安城の発掘調査と研究」、龔国強氏には「唐大明宮太液池2003年春期の発掘調査成果」、龍瑞氏には「広州南越国の王宮と官署遺跡の新発見」、繆雅娟女史には「古代城跡と中国文明の起源」と題する講演をして頂いた。

一方、日本側は、秋に岡村道雄平城宮跡発掘調査部長を団長とする5名の研究者を派遣し、今後の研究計画を協議策定するとともに、秋期の発掘調査現場や春期の発掘調査出土遺物などを視察した。また、12月末から1月中頃にかけて、平城宮跡発掘調査部各研究室から各1名、総計5名の研究員を派遣し、報告書作成のための出土遺物の調査を実施した。

この他、2004年度刊行を目指し、従前に実施した漢長安城の共同発掘調査報告書を双方協力して作成している。



太液池北岸の建物遺構(西南から)



中国社会科学院名誉教授称号授与

●遼寧省文物考古研究所との共同研究

2002年度から4ヵ年計画ではじまった「3-6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」は、三燕時期の主要な墳墓ごとに、出土遺物について比較研究をおこなうことにしている。喇嘛洞墓地出土遺物の検討が一段落した2003年度については、双方協議の結果、甜草溝墓、十二台88M1墓、崔遙墓を対象とすることで合意した。甜草溝墓は、数多くの金製装身具類を出土した晋代(3世紀末~4世紀前葉)の墓であり、十二台88M1墓は、重装騎兵装備をはじめとする豊富な副葬品を出土した前燕(4世紀中葉)の墓である。また、崔遙墓は建興10年(395年)の年紀と被葬者名を刻む墓誌を出土した後燕の墓である。

9月には、日本側が訪中し、遼寧省文物考古研究所において、上記墳墓出土遺物について観察・実測・写真撮影を進めるとともに、金製品、金銅製品を中心に理化学的分析を試みた。これに対し、11月には遼寧省文物考古研究所の研究員6名を招聘し、日中墳墓出土遺物の比較検討をおこなうとともに、訪日の機会をとらえて、一般聴衆者を対象に、中国における古代磚塔修復の理念と実際に関する講演会(講演者王晶辰所長・演題「中国朝陽北塔修復」)を開催した。

また、昨年度、遼寧省文物考古研究所が編集・発行した『三燕文物精粹』の日本語訳を刊行した。

●河南省文物考古研究所との共同研究

2000年度から5ヵ年計画で実施している事業で、鞏義市大・小黄冶、白河村に所在する唐三彩窯跡及びその産品に関する共同研究である。

2002年度から本格的な窯跡の発掘調査が始まったが、2003年度も春期と秋期に2回の調査を実施した。奈良文化財研究所員は、秋期の発掘調査に参加し、併せてサーズの影響で参加できなかった春期発掘調査出土遺物の調査をおこなった。5月の発掘調査は、小黄冶塔湾村地区で実施し、調査地点は、昨年度の発掘調査区の南方、約30メートルの地点に当たる段丘面である。この調査では唐三彩の窯は検出されなかったが、大量の三彩陶器や窯道具等が出土した。秋期の発掘調査は、小黄冶塔湾村と大黃冶瓦窯溝村の2箇所で行ったが、遺構面は非常に深く、滞在期間中には、遺構の全貌を知る事はできなかった。

10月には、研究員を招聘し、情報交換をおこなうと

ともに関連する遺跡・遺物を共同で調査し、学术交流を図った。また、滞在期間中には、公開講演会を開催し、張志清副所長には「近年における河南重要考古発見」、郭木森氏には「中国鞏義市黄冶唐三彩窯跡の発掘調査の主要成果」と題する講演をして頂き、共同研究の成果を公表した。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

韓国国立文化財研究所とは、日本の都城並びに百済・新羅王京の形成と発展過程に関する共同研究と生産遺跡に関する共同研究を実施している。この他、毎年短期ではあるが、両研究所は、様々な分野の研究員を相互に派遣し、学术交流を図っている。本年度は、平城宮跡発掘調査部主任研究官高橋克壽を派遣した。滞在期間中には、韓国の考古学研究者と意見を交換するとともに、「日本古墳時代の編年」と題する講演をおこなった。

2003年度も都城に関する共同研究では、日本の研究者は、新羅王京跡、慶州の発掘現場や関連遺跡などを踏査し、また、新羅王京跡出土遺物の視察をおこなった。一方、韓国側研究者は、藤原宮跡の発掘調査現場や飛鳥地域などの関連遺跡を視察した。また、滞在期間中に、公開研究会を開催し、金教年氏に「慶州九黄洞苑地遺跡の調査状況」と題する講演をして頂いた。

生産遺跡に関する共同研究では、本年度は、慶州・扶余を中心とする新羅・百済の瓦の調査を実施した。また、4名の韓国人研究者を招聘し、報告書刊行に向けて現在整理中の飛鳥池工房跡出土遺物を観察検討して貰い有益な教示を頂いた。

●アフガニスタン文化遺産保存修復のための緊急協力事業

当事業は、文化庁の委託を受け、東京文化財研究所と共同で実施した。9月初旬、アフガニスタン・イスラム移行行政権情報省との間で協力事業に関する協定書を締結し、世界文化遺産になったバーミヤン仏教遺跡の保護事業と現地人スタッフ養成のための研修事業をおこなった。本年度のバーミヤン遺跡の保護事業は、遺跡の範囲確認に重点を置き、仏巖の前面に広がる平地部分、32ヘクタールを対象に非破壊地下探査(レーダー探査法)をおこない、遺構の分布状況を把握した。研修はカブール博物館において、土でできた

遺物(テラコッタ)を対象にした保存修復技術のトレーニングを実施した。研修も終わりに近付いた頃、スタッフが宿泊しているホテルがロケット弾によるテロ攻撃を受けたが、全員無事に任務を果たし帰還する事ができた。改めて、テロ・治安状況に関する綿密な情報収集のネットワークの必要性を痛感する事になった。

●異なる気象条件下における不動産文化財の発掘技術及び保存に関する調査研究

当研究はカンボジアとチリの遺跡、遺物を対象に実施している。カンボジア・アンコール文化遺産保護に関する研究協力は1993年から開始し、これまでに3年を1フェイズとする3回9年間にわたる事業をおこなってきた。これまでに延べ32名の研究員交流をおこなうとともに、上智大学国際調査団と共同でバンテアイクデイ遺跡やタニ窯跡群の調査研究をおこなってきた。2002年からはアンコール・トム内にある西トップ寺院跡を対象とした新たな共同研究事業を発足させた。今回は事業期間を2005年度までの4年間とし、事業開始当初に定めた発掘調査、遺跡探査、広域遺跡整備などの諸研究を、現地のAPSARA(アンコール地区遺跡整備開発機構)と共同でおこなう予定である。

西トップ寺院は、バイヨンの西約500mほどに位置する小型の石造寺院遺跡である。同寺院からは9世紀の碑文が発見されているものの、現存するものは建築形式などより10世紀に建立されたものと考えられ、それ以後13世紀から17世紀にかけて仏教寺院として再興されたと推定されている。この共同研究では西トップ寺院の変遷を明らかにするにとどまらず、アンコール王朝崩壊後の中世の仏教寺院としての姿を明らかにし、この地の中世史をより一層、豊かなものにする事を目指している。また発掘現場を共同研究の場とすることによって、より実効性のある人材育成を進めることが可能になると考えている。

西トップ寺院での共同研究開始に当たり、2002年12月6日に現地においてAPSARA(アンコール地区遺跡整備開発機構)との覚書調印式をおこない、翌7日に現場で調査の鉄入れ式を執りおこなった。本年度はこれに加えて、これに先立つ8月には、西トップ寺院調査の第1回目調査として、平板による地形測量を実施した。2003年度には、遺跡に残る現存建物の詳細な図面を作成するとともに、小規模な発掘調査を実施し、

地下遺構の状況を明らかにし、2004・2005年度には、本格的な発掘調査と諸図面の完成を目指す予定である。

チリにおいてはイースター島のモアイ石像を保存修復するための調査研究をチリ国立文化財保存修復センターと共同ですすめてきている。本年度はアフトンガリキのモアイ石像15体の保存処置ならびにモアイ石像の風化に関する基礎的な現地調査をおこなった。

アフトンガリキのモアイ石像の保存処置は、ユネスコの世界遺産保護事業への協力である。これまでイースター島でおこなってきた暴露試験結果をもとに、含浸強化剤として市販の有機珪酸エステル(Wacker社OH100)を選定するとともに、浸透性の高い薬剤と浸透性の低い薬剤を新たに調製し、劣化状態に応じて薬剤の使い分けをおこなった。含浸強化にあたっては、事前にモアイ石像全体の表面強度を軟岩ペネトロメータにより測定して劣化状態(強度とその分布)を把握した。含浸強化処理後、所定の硬化期間の後、撥水処理をおこなった。

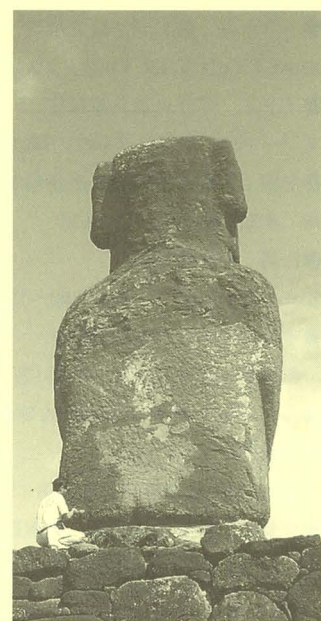
また、イースター島におけるモアイ石像の保存修復を考えるには、モアイ石像がどのような劣化を生じているかを知ることが今回の保存処置のみならず今後の保存への取り組みにも重要なことである。このような観点から、モアイ石像に生じている劣化の要因を探るために、赤外線サーモグラフィなどにより基礎的な調査を実施した。



西トップ寺院第1次発掘調査



モアイ石造の修復



モアイ石造の劣化状態の調査

海外からの主要訪問者一覧

- ドイツ：ベルリン日独センター事務総長
アンゲリカ フィーツ／'03.4.9
- 台湾：国立台南芸術学院
コウホンイン／'03.4.15
- フランス：国立パトリモン研究所修復部門
Claire Breda／'03.5.2～7.31
- ドイツ：構造設計専門家
Matthias Beckh／'03.5.20～6.20
- ベトナム：社会科学院 ベトナム考古学院
グエン・キム・ズン／'03.7.9～8.1
- 韓国：京畿文化財団 畿甸文化財研究院
金雄信 外3名／'03.8.6
- カンボジア：
スー・ソティ／'03.9.8～9.22
- ポルトガル：トマル工芸研究所
Sofia Isabel Carreiro e Julio 外1名／
'03.9.15～10.15
- 英国：ケンブリッジ大学大学院博士課程
中西裕見子／'03.10.1～'04.3.31
- 韓国：韓国地質資源研究院
梁ドンユン／'03.10.21
- 韓国：韓国地質資源研究院
李ジンヨン／'03.10.21
- 中国：上海博物館
陸明華／'03.10.30
- ベトナム：南アジア研究機構
Dr.NGUYEN VAN VIET／'03.11.11
- イラン：イラン文化遺産庁
マジードカーメイ 外6名／'03.12.9
- 中国：大明宮含元殿工事事務所
高 本憲 外1名／'03.12.10
- 台湾：中央科学院
リー・クワンチー／'04.12.20～12.24
- イラン：イラン文化遺産庁
ハミード・ファヒーミー 外1名／'04.1.20
- エジプト：カイロ大学考古学部保存修復
学科助教授
Ahmed Sayed Ahmed Shoeib／'04.1.22
- ロシア：科学アカデミー極東研究所
ユーリー・ヴォストレツォフ／'04.2.4～2.5

- ドイツ：フンボルト大学
ステファン アルテカンブ／'04.2.23～4.4
- 韓国：畿甸文化財研究所
丁海得 外4名／'04.2.26
- 英国：ダラム大学
キース・ドブニー／'04.3.25～4.8
- 中国：河南省文物局
杜啓明 外9名／'04.3.30

海外からの招聘者一覧

- 中国：中国社会科学院考古研究所研究員
安家瑤／'03.9.20～9.30
- 中国：中国社会科学院考古研究所副研究員
繆雅娟／'03.9.20～9.30
- 中国：中国社会科学院考古研究所助理研究員
刘 瑞／'03.9.20～9.30
- 中国：中国社会科学院考古研究所副研究員
袁国强／'03.9.20～10.19
- 中国：中国社会科学院考古研究所助理研究員
李存信／'03.9.20～10.19
- 中国：河南省文物考古研究所副所長
張志清／'03.10.14～10.29
- 中国：河南省文物考古研究所副所長
胡永慶／'03.10.14～10.29
- 中国：河南省文物考古研究所館員
馬曉建／'03.10.14～10.29
- 中国：河南省文物考古研究所副研究員
王竜正／'03.10.14～10.29
- 中国：河南省文物考古研究所館員
郭木森／'03.10.14～10.29
- カンボジア：アプサラ文化局長
アン・チュリアン／'03.10.25～11.4
- カンボジア：アプサラ総裁
プン・ナリット閣下／'03.10.25～11.4
- 中国：遼寧省文物考古研究所所長
王晶辰／'03.10.25～11.5
- 中国：遼寧省文物考古研究所科長
王玉斌／'03.10.25～11.5
- 中国：遼寧省文物考古研究所主任科員
陈术实／'03.10.25～11.5
- 中国：遼寧省文物考古研究所資料管理員
李光明／'03.11.15～11.26
- 中国：遼寧省文物考古研究所考古隊員
李維宇／'03.11.15～11.26
- 中国：遼寧省文物考古研究所主任
万雄飛／'03.11.15～11.26
- カンボジア：王立芸術大学卒業生
Mr.Sok Keo Sovannara／'04.1.15～2.13
- カンボジア：王立芸術大学卒業生
Mr.Chhum Meng Hong／'04.1.15～2.13
- カンボジア：王立芸術大学卒業生
Mr.Khut Sokhan／'04.1.15～2.13
- カンボジア：王立芸術大学卒業生
Ms.Ourn Sinang／'04.1.15～2.13
- カンボジア：王立芸術大学卒業生
Ms.Prak Sinath／'04.1.15～2.13
- 米国：ダンバートンオークス研究所ラ
ンドスケープ研究部長
ミシェル・コナン／'04.1.19～1.25
- 中国：甘肅省博物館副館長
馬清林／'04.2.5～2.14
- 中国：甘肅省博物館文物保護部副主任
張健全／'04.2.5～2.14
- 大韓民国：国立慶州文化財研究所長
尹光鎮／'04.2.9～2.21
- 大韓民国：国立慶州文化財研究所学芸研
究士
金教年／'04.2.9～2.21
- 大韓民国：国立文化財研究所 学芸研究士
崔仁華／'04.2.9～2.21
- 大韓民国：国立文化財研究所 遺跡調査室
長
申昌秀／'04.2.16～2.21
- 大韓民国：国立文化財研究所 学芸研究士
李恩碩／'04.2.16～2.21
- カンボジア：王立芸術大学研究員
Vooun Vuthy／'04.3.1～3.7
- 大韓民国：国立群山大学校博物館学芸研
究士
郭長根／'04.3.15～3.24

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 松井 章：アメリカ合衆国
'03.4.2～4.9／湿地考古学研究プロジェクト
オリンピック大会 文部科学省負担
- 森本 晋：オーストリア
'03.4.7～4.14／「考古学におけるコンピュータの応用」学会出席・発表 科学研究費
- 金田 明大：オーストリア
'03.4.8～4.15／国際学会CAAにて研究・発表 科学研究費
- 小池 伸彦：大韓民国
'03.4.9～4.11／奈良文化財研究所創立50周年記念「飛鳥・藤原京展」の展示遺物の返却に伴う、遺物の開梱・検品の立会 他機関
- 高妻 洋成：チリ共和国
'03.5.3～5.10／環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査研究
運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国
'03.5.21～5.27／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 花谷 浩：カンボジア王国
'03.5.21～5.27／タニ窯跡出土遺物および西トップ寺院の調査 運営費交付金
- 深澤 芳樹：大韓民国
'03.7.22～7.25／朝鮮半島松菌里式土器の製作技法の検討 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア王国
'03.8.18～8.28／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 神野 恵：カンボジア王国
'03.8.18～8.28／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査 運営費交付金
- 林 正憲：トルコ共和国
'03.8.23～9.6／学術目的の発掘調査に参加するため 他機関負担
- 田辺 征夫：アフガニスタン
'03.9.6～9.15／バーミヤーン地下遺跡探査の事前調査及びそれに関するアフガニスタン政府との協議 東京文化財研究所
- 森本 晋：アフガニスタン
'03.9.6～9.15／バーミヤーン地下遺跡探査の事前調査及びそれに関するアフガニスタン政府との協議 東京文化財研究所
- 巽 淳一郎：アフガニスタン
'03.9.6～9.15／バーミヤーン遺跡非破壊考古学調査のための予備調査 東京文化財研究所
- 村上 隆：ドイツ・オーストリア
'03.9.7～9.16／国際シンポジウム「ヨーロッパの博物館・美術館における日本関係コレクション」及び研究打合せ 科学研究費
- 今井 晃樹：アメリカ合衆国・カナダ
'03.9.12～9.19／中国古代青銅器の調査
科学研究費
- 島田 敏男：ベトナム社会主義共和国
'03.9.15～9.19／「ベトナム社会主義共和国ハティ省ドンラム村の保存計画策定についての調査研究」で今後の研究の進め方について協議を行う 他機関負担
- 小池 伸彦：中華人民共和国
'03.9.17～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 豊島 直博：中華人民共和国
'03.9.17～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 小林 謙一：中華人民共和国
'03.9.17～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア王国
'03.9.20～9.24／アンコール遺跡群現地調査
科学研究費
- 金子 裕之：中華人民共和国
'03.9.24～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 牛嶋 茂：中華人民共和国
'03.9.20～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 高妻 洋成：中華人民共和国
'03.9.24～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 肥塚 隆保：中華人民共和国
'03.9.24～9.27／日中古代墳墓副葬品の比較研究 科学研究費
- 井上 和人：大韓民国
'03.9.25～9.29／「新羅王京調査の成果と意義」で講演 先方負担
- 松井 章：英国
'03.9.25～10.5／ブタ会議 科学研究費
- 森本 晋：アフガニスタン
'03.9.27～10.9／アフガニスタン文化財保存修復のための緊急協力事業バーミヤーン地下遺跡探査 東京文化財研究所
- 高瀬 要一：中華人民共和国
'03.10.1～10.13／東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究 科学研究費
- 小澤 毅：アフガニスタン
'03.10.4～10.26／バーミヤーン遺跡地下探査
東京文化財研究所
- 深澤 芳樹：大韓民国
'03.10.6～10.14／松菊里式土器におけるタキ技法の検討 科学研究費
- 岡村 道雄：中華人民共和国
'03.10.7～10.12／内蒙古自治区興隆溝遺跡の調査 日本・中国先史時代遺跡共同調査実行委員会
- 井上 和人：中華人民共和国
'03.10.12～10.19／資料収集 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア王国
'03.10.13～10.18／カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の調査 科学研究費
- 森本 晋：カナダ
'03.10.14～10.19／バーチャルシステムとマルチメディア学会での研究発表
運営費交付金
- 小野 健吉：アメリカ合衆国
'03.10.14～11.14／欧米庭園考古学資料収集、日本庭園考古学に関する情報提供
運営費交付金
- 岡村 道雄：中華人民共和国
'03.10.27～11.1／中国太液池共同調査
運営費交付金
- 島田 敏男：中華人民共和国
'03.10.27～11.5／中国太液池共同調査
運営費交付金
- 市 大樹：中華人民共和国
'03.10.27～11.10／中国太液池共同調査
運営費交付金
- 今井 晃樹：中華人民共和国
'03.10.27～11.10／中国太液池共同調査
運営費交付金

- 町田 章：中華人民共和国
'03.11.1~11.4/中国社会科学院名誉教授
与式 運営費交付金
- 巽 淳一郎：中華人民共和国
'03.11.1~11.4/唐三彩資料調査
運営費交付金
- 森本 晋：タイ王国
'03.11.6~11.10/遺跡情報表現法の調査
科学研究費
- 高妻 洋成：アフガニスタン
'03.11.15~11.24/アフガニスタン文化財保
存・修復協力 東京文化財研究所
- 肥塚 隆保：アフガニスタン
'03.11.15~11.25/アフガニスタン文化財保
存・修復協力 東京文化財研究所
- 西口 壽生：中華人民共和国
'03.11.20~11.28/唐三彩窯跡の発掘調査
運営費交付金
- 巽 淳一郎：中華人民共和国
'03.11.20~11.28/唐三彩窯跡の発掘調査
運営費交付金
- 高橋 克壽：中華人民共和国
'03.11.20~11.30/唐三彩窯跡の発掘調査
運営費交付金
- 小林 謙一：大韓民国
'03.11.27~12.5/韓国古墳出土武器・武具関
連資料の調査 科学研究費
- 田辺 征夫：大韓民国
'03.11.30~12.5/韓国古代都城の用排水系統
に関する資料収集と調査 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア王国
'03.12.3~12.11/カンボジアにおける中世遺
跡と日本人町の調査 科学研究費
- 井上 直夫：カンボジア王国
'03.12.3~12.11/タニ窯跡出土土器、瓦等撮
影 運営費交付金
- 花谷 浩：カンボジア王国
'03.12.3~12.11/タニ窯跡出土遺物の調査・研
究 科学研究費
- 高橋 克壽：大韓民国
'03.12.10~12.16/国立文化財研究所との研
究交流 運営交付金
- 清野 孝之：中華人民共和国
'03.12.28~04.1.11/唐大明宮太液池共同研
究 運営費交付金
- 今井 晃樹：中華人民共和国
'03.12.28~04.1.11/唐大明宮太液池共同研
究 運営費交付金
- 神野 恵：中華人民共和国
'03.12.28~04.1.11/太液池出土陶磁器の資
料調査 運営費交付金
- 山本 紀子：中華人民共和国
'04.1.4~1.11/唐大明宮太液池共同研究
運営費交付金
- 次山 淳：中華人民共和国
'04.1.4~1.11/唐大明宮太液池共同研究
運営費交付金
- 清水 重敦：大韓民国
'04.1.17~1.24/韓国における歴史的建造物
保存・修復の実地調査及び資料収集
科学研究費
- 森本 晋：ベルギー・フランス
'04.1.19~1.24/カンボジア出土遺物の調査
科学研究費
- 清野 孝之：大韓民国
'04.2.3~2.7/百濟地域出土瓦と8世紀の日本
の瓦との比較検討のため 科学研究費
- 森本 晋：カンボジア王国
'04.2.5~2.11/アンコール地区調査国際調整
委員会に出席 科学研究費
- 小野 健吉：スペイン
'04.2.8~2.18/世界遺産保存修復状況調査
運営費交付金
- 今井 晃樹：台湾
'04.2.9~2.13/故宮博物院国立歴史博物館で
の調査 科学研究費
- 高妻 洋成：チリ共和国
'04.2.10~2.24/過酷気象条件下における不
動産文化財の劣化と保存修復に関する共同
研究 運営費交付金
- 降幡 順子：チリ共和国
'04.2.10~2.24/出土遺構の露出展示法の開
発研究 運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国
'04.2.19~2.25/アンコール遺産保護共同研
究現地調査 科学研究費
- 清野 孝之：カンボジア王国
'04.2.19~2.25/アンコール遺産保護共同研
究現地調査 運営費交付金
- 岡村 道雄：ドイツ
'04.2.22~2.28/日本の考古展に係る展示計
画打合せ 文化庁負担
- 深澤 芳樹：ドイツ
'04.2.22~2.28/日本の考古展に係る展示計
画打合せ 文化庁負担
- 肥塚 隆保：チリ共和国
'04.3.2~3.16/過酷気象条件下における不動
産文化財の劣化と保存修復に関する共同研
究運営費交付金
- 田辺 征夫：大韓民国
'04.3.3~3.6/出土繊維製品の調査
他機関負担
- 小林 謙一：大韓民国
'04.3.3~3.6/出土繊維製品の調査
他機関負担
- 小池 伸彦：中華人民共和国
'04.3.10~3.13/日中古代墳墓副葬品の比較
研究 科学研究費
- 小林 謙一：中華人民共和国
'04.3.10~3.13/日中古代墳墓副葬品の比較
研究 科学研究費
- 島田 敏男：ベトナム
'04.3.11~3.14/ハティ省ドンラム村の保存
計画策定についての調査研究 他機関負担
- 清水 重敦：ベトナム
'04.3.11~3.15/ハティ省ドンラム村の保存
計画策定についての調査研究 他機関負担
- 金井 健：ベトナム
'04.3.11~3.15/ハティ省ドンラム村の保存
計画策定についての調査研究 他機関負担
- 杉山 洋：カンボジア王国
'04.3.11~3.19/アンコール遺産保護共同研
究現地調査 科学研究費
- 内田 和伸：大韓民国
'04.3.11~3.19/日韓都城に関する共同研究
のため 運営費交付金
- 山崎 信二：大韓民国
'04.3.11~3.19/日韓生産遺跡に関する共同
研究のため 運営費交付金
- 渡辺 丈彦：大韓民国
'04.3.11~3.19/日韓都城に関する共同研究
のため 運営費交付金

●林 正憲：大韓民国

'04.3.11～3.19／日韓共同研究にともなう調査 運営費交付金

●高瀬 要一：ベトナム・インドネシア

'04.3.11～3.21／ベトナムタイホワ州胡朝城保存整備に関する調査研究 他機関負担

●森本 晋：カンボジア王国

'04.3.12～3.17／石造遺構形状電子化のための調査 運営費交付金

●千田 剛道：大韓民国

'04.3.16～3.19／博物館展示の調査及び遺跡踏査 運営費交付金

●巽 淳一郎：中華人民共和国

'04.3.21～3.26／共同研究打合せ 運営費交付金

●島田 敏男：大韓民国

'04.3.25～3.28／日韓文化財建造物交流についての協議 文化庁負担

発掘調査現地説明会

◆2003年6月9日(月)・10日(火)

飛鳥藤原第119-5次(川原寺寺域北限)発掘調査見学会
参加者:2000名 調査面積:400㎡

◆2003年6月14日(土)

平城第364・355次(平城宮東区朝集殿院東南部)発掘調査
平城宮跡発掘調査部遺構調査室 山本 紀子
参加者:390名 調査面積:1534㎡

◆2003年6月21日(土)

飛鳥藤原第128次(藤原宮朝堂院東南隅)発掘調査
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室 箱崎 和久
参加者:1030名 調査面積:1024㎡

◆2003年8月23日(土)

平城第360次(第一次大極殿院南面築地回廊)発掘調査
平城宮跡発掘調査部資料調査室 山本 崇
参加者:400名 調査面積:600㎡

◆2003年11月15日(土)

平城第365次(名勝旧大乘院庭園)発掘調査
平城宮跡発掘調査部遺構調査室 金井 健
参加者:363名 調査面積:390㎡

◆2003年11月22日(土)

飛鳥藤原第129次(石神遺跡第16次)発掘調査
飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料調査室 内田 和伸
参加者:600名 調査面積:690㎡

◆2004年3月20日(土)

飛鳥藤原第132次(朝堂院東第三堂)発掘調査
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室 市 大樹
参加者:396名 調査面積:977㎡

◆2004年3月27日(土)

平城第367次(中央区朝堂院朝廷)発掘調査
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室 金田 明大
参加者:1051名 調査面積:1900㎡



飛鳥藤原第132次(朝堂院東第三堂)発掘作業(北から)

公開講演会

第92回公開講演会 2003年5月17日

町田章所長から、前回より考古学をわかりやすくするため、概念的なお話をしている旨挨拶の後、「考古学よもやま話—剣と刀—」と題して、剣と刀の倭の国への発達の講演があった。特に文化の伝承の仕方について、出土した銅剣、漢式大刀、鉄剣、楔形柄頭大刀など略図を通し、弥生銅剣日本大刀の起源、剣が権威・神格を表す儀器であったこと6世紀以降実用の剣は存在しないが儀器としての鉄剣は珍重され、刀よりも格式が高いなどのお話が好評であった。

◆高橋克壽：大王の家

古墳の頂きや附属の施設に据え置かれる家形埴輪は、いったい何のために何を写したものでしょうか。現存する寺院建築以前の日本の建築を知る上で、この種の形象埴輪は以前より考古学者や建築史学者の研究対象となってきた。しかし、その解釈はいまだ定まっておらず、生前の住まいを模しているとするものから、死後の住まいを用意したとするもの、あるいは殯屋を象ったとする意見まで多様である。そこで、これらを据え置かれる位置と共存する埴輪群との関係などを考慮して整理すると、埴輪の家形埴輪は造り出しや外堤に人物や動物の埴輪と並べ置かれるものとはつきり区別されることがわかる。これらは埋葬された人物の魂や首長霊と関連する装置である。これに対して、後者の家形埴輪は、人物や動物が繰り広げる場面の舞台を用意したものであり、それらは基本的に王の葬送儀礼に関連する施設であると考えられる。よって、そこに死後の住まいはない。

◆清水重敦：館を縮める—模型と建築の間

遺跡における復原建物は、時に「実物大の模型」と表現されることがある。いわば復原建物の持つ毒を中性化しようとする志向が感じ取れる表現だが、逆に「模型」の語を広く捉えたとき、復原建物の意義の再考を促す契機としても受け取ることができる。本講演では、この表現を手がかりに、建築における模型の意味について論じ、復原建物の意義を考える糸口の提示を試みた。

歴史の中の建築模型は、一般的にはオリジナルに対する二次的生成物で、かつ縮小されたものであるが、近世には本質を抽出しながらの自在なデフォルメや、スケールの操

作によって、オリジナルの二次的生成物という位置を越えた独自の可能性を模型が有することもあった。しかし、こうした模型の可能性は、近代における復原模型というジャンルの登場により忘却され、「模型」の価値観も限定されていった。

想定されるオリジナルへの接近を一つの目的とする建物復原であるが、オリジナルはあくまでも100%確実なものではない。それゆえに、建物の復原には、近代以降の模型の価値観を超えた新しい可能性を生む余地が残されているはずだと考えたい。

第93回公開講演会 「奈文研国際研究 アジアの考古学」 2003年11月16日

◆毛利光俊彦：中国北朝の瓦と飛鳥の古瓦

漢代から初唐に至る軒丸瓦について、文様ごとにその変遷を概観した。吉祥句を主とした文字文は漢代から5世紀前半まで、区画が十文字から井桁に変わること、蓮蕾文は漢代の雲文をベースとして、3世紀末頃には遼寧省の金嶺寺遺跡で出現し、4世紀中頃に高句麗へ波及したこと、そして4世紀後半から5世紀初めに雲文から脱却した蓮蕾文が北魏や高句麗で完成され、その影響が日本の高句麗系軒丸瓦（豊浦寺など）に及んだことを示した。この過程で、480年頃に建立された北燕の朝陽北塔の創建瓦の年代観、高句麗王陵の比定について問題提起した。軒平瓦は、瓦当下端を波状にただけの金嶺寺遺跡例が最古級で、これが5世紀前半まで墨守されたことも示した。

素弁と複弁の蓮華文軒丸瓦は、5世紀後半に北朝とそれに南朝でも出現し、いずれも弁端が尖ること、これらには波状文と弧線をいれた二重弧文軒平瓦が伴うこと、素弁軒丸瓦の一部は6世紀前半に百濟、そして6世紀末には日本（飛鳥寺など）に及んだことを示した。

飛鳥寺の創建瓦の一つである、弁端に切込みがある素弁軒丸瓦は、北朝と南朝では6世紀中頃近くになるらしいこと、百濟大寺創建瓦の単弁軒丸瓦は、仏光を表す重圈文をめぐらし、その祖型が雲崗石窟の仏像にあること、川原寺の複弁軒丸瓦は、鋸歯文をめぐらす、これも仏光らしいこと、弁端が窪むのは隋末～初唐の西安・西明寺下層出土瓦の影響があることなどを推定した。だが、百濟大寺や川原寺の軒丸瓦と同じものは中国・韓半島でも見付かってなく、これらと組み合う、波文のない三・四重弧文軒平瓦の故地も謎とした。

研究集会

◆古代官衙・集落研究会

2003年12月12～13日

昨年度は「駅家と在地社会」をテーマに研究集会を開催した。これは、駅家についての考古学的調査研究の現状を押さえながら、駅家の構造・変遷やその機能、運営、在地社会との関わり、駅戸集落との関係などに焦点をあてつつ、古代の交通と在地社会のあり方、在地支配との関わりについて考え、問題点を整理することを目的としたものである。

研究報告は、館野和己「古代の交通と在地社会」、田中広明「東山道駅路の変遷と集落の編成」、岸本道昭「駅家とその周辺－龍野市小犬丸遺跡を中心として－」、小田賢「兵庫県上郡町落地八反坪遺跡・落地飯坂遺跡の調査」、三浦純夫「北陸の駅家関係遺跡－石川県津幡町加茂遺跡を中心として－」、高橋美久二「駅家の構造」、永田英明「駅家と駅戸」、馬場基「駅伝制と地方支配」の8本で、地方公共団体・大学・博物館関係者等140名余が参加し、討議をおこなった。

アンケートでは8割以上の参加者から研究集会が有意義であったとの回答を得た。

本年度にこの研究集会の報告論文・討議録を刊行する予定である。(山中敏史)

◆古代庭園研究会

2003年12月18～19日

2001年度からおこなっている日本の古代庭園に関する調査研究の第3年度研究集会。今年度は奈良時代の平城宮東院庭園、平城京左京三条二坊宮跡庭園、周防国府跡庭園遺構をはじめ計15か所の庭園遺構について情報を収集・交換し、検討を加えた。研究会では各遺跡の発掘調査担当者等からスライドを交えて発掘成果を紹介してもらい、それらの情報をもとに参加者間で奈良時代庭園について討議した。討議でははじめに人工的色彩の強い飛鳥時代庭園に比べ、奈良時代庭園が自然的デザインに基づいていることを確認した。その上で、飛鳥時代庭園との差異が生じた要因、おのおの庭園デザインの根底にある思想的背景、などについて意見を出し合い、飛鳥・奈良時代庭園に関する認識を深めた。デザインの起源では方池の起源、洲浜の起源についてさまざまな見解が示されたのも成果である。

今年度までの3か年で奈良時代までの庭

園遺構についてひとつひとつの検討を加えることができたので、次年度は曲水宴など庭園を使っておこなわれる儀式、宴遊と発掘遺構との関連を研究するなど、庭園遺構の性格や用途についてさらに研究を深めていく方向を確認した。(高瀬要一)

◆保存科学研究集会

2004年2月6日

わが国には九州地方の装飾古墳や最近話題となっている奈良の高松塚古墳やキトラ古墳などがあり、壁画の保存修復においては、数多くの問題が存在している。これらの問題を解決するためには、基礎的な研究と併せ、個々の状況に応じた実践的な研究を進めていく必要がある。これらの問題点は中国における壁画の保存修理とも共通する課題が多いことから、古代中国壁画の保存修復に携わる専門家を招聘し、「日中における古代壁画の保存修復」をテーマに、古代顔料の分析などの自然科学的な調査から様々な状況での保存修復技術などを取り上げて、講演会形式で保存科学研究集会を開催した。講演タイトルは以下の通りである。「法界寺壁画の修理」(岡泰史)、「大召の壁画材質分析・保護修復研究」(杜曉黎)、「甘肅玉門火燒溝遺跡出土赤－黄色混合顔料の電子顕微鏡とレーザーラマン分析」(馬清林)、「甘肅武威天梯山石窟壁画・塑像の修復」(張健全)、「新疆ウイグル自治区クムトラ千佛洞の病害研究と保護」(王金華・杜曉帆)。講演終了後に短時間ではあったが質疑応答の時間を取ったところ、壁画そのものの保存修復から調査研究法に至るまで活発な討論がおこなわれた。壁画に限らず、不動産文化財の保存修復に対する考え方などについて意見交換できたことはきわめて有意義であった。(肥塚隆保)

◆飛鳥白鳳の瓦づくり

一川原寺式軒瓦の成立と展開(2)－

2004年2月28日～29日

川原寺式軒瓦の全国的な広がりを検討する2回目の研究会である。前回は川原寺と同範の軒瓦を出土する大和・山城・近江・伊勢を中心に議論した。今回は川原寺の軒丸瓦に類似する文様をもつ撰津・河内・和泉・紀伊・美濃・尾張・上総・下野・上野および中国地方の川原寺式軒丸瓦について議論した。

全国の川原寺式軒瓦を軒瓦・丸瓦・平瓦のセットとして考え、丸瓦部が玉縁か行基

かを確認する、組み合わせる重弧文軒平瓦の側面形が剣先形か直線形かを確認する、平瓦が凸面布目平瓦を含むものであるかどうかを検討した。

山田寺式軒瓦の検討に際しての結論と同じく、狭義の川原寺式軒瓦の組み合わせ(技法・丸平瓦のセット関係を含めたもの)は全国的にはあまり広がらないことが明らかになり、山城の高麗寺や近江の湖東での諸例との比較研究も必要となってきた。川原寺式軒瓦が単に文様面での比較研究だけでなく、技法面を中心として軒瓦・丸瓦・平瓦のセットとして検討されたのは今回が初めてであり、考古学的な検討としてはより深まったといえる。会場は名古屋市博物館で、参加者は160名であった。

(山崎信二)

文部科学省科学研究費助成研究

◆生活生産遺跡出土資料研究に基づく近世科学技術の比較研究の総合化

代表者・村上 隆 特定領域研究(1) 継続

本研究は、生活生産遺跡の発掘調査に伴って出土する考古資料を主な研究対象とし、近世の「モノづくり」技術の系譜を探ると共に、古代から現代に繋がる時間軸上で捉え直すことを目的としている。最新の機器分析を応用した材料科学的な手法を駆使する点が本研究の大きな特徴として挙げられる。調査対象は、金属を中心に、陶磁器、顔料まで視野に入れている。金属に対する本年度の調査・研究では、近世技術の先駆となる古代金工に用いられた材料の変遷を追う調査をおこなった。さらに、近世の鋳山技術に関わる一連の作業の再評価をおこない、特に銀精錬工程の最終段階の解明に大きな成果を挙げることができた。研究成果の一端は、国内学会をはじめ、「国際鋳山ヒストリー会議」などの国際会議においても発表をおこなった。さらに、シンポジウム『生産遺跡から探る「モノづくり」の歴史』を企画し、第一回「金山・銀山の技術」を開催した。陶磁器に関しては、前年度に引き続き、近世陶磁器の施釉技術とその発色メカニズムを探っている。顔料に関しては、赤色を呈する顔料としてのベンガラ発色のメカニズムの研究を通して、ベンガラ製作技術の検証を継続している。

◆カンボジアにおける日本人町と中世遺跡の研究

代表者・杉山 洋 特定領域研究(2) 新規

本年度から5カ年計画で当該研究が発足した。本研究は特定研究「中世考古学の総合的研究」のなかの1計画研究として、日本の中世期における周辺諸国との関係を、考古学的な視点から明らかにすることを大きな目的としている。具体的には現地文化財監督官庁がプノンベン文化芸術省と、シエムリアップのアプサラ機構に2分されていることから、前者とは日本人町の研究を、後者とは中世窯業生産の研究を共同研究として行うことを目指している。本年度は、準備年として情報収集と両機関との調整をおこなった。来年度以降本格的な調査研究活動を開始する予定である。

◆推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発

代表者・渡邊晃宏 基盤研究(S) 新規

1961年の平城宮第一号木簡の発見以来、当研究所が40年間に培ってきた木簡など出土文字資料解読のノウハウを広く調査・研究者の方々と共有し、また私たち自身の解読の能率化を図ろうというのがこの研究の趣旨である。所外からも理系を中心に6名の先生方に研究分担者として協力を得ている。研究項目としては、a 木簡の文字情報を簡易にデジタル化するシステムの開発、b 木簡の「文字」の事典の作成、c 木簡の積読作業を支援するデータベース群の構築、d 木簡積読用のOCRの開発を四本の柱とする。初年度にあたる本年度は、文字画像切り出しソフトを開発し、木簡の文字画像の切り出しに着手した。また、木簡を解読した際に作成した見取図及びデータを記入したノート(記帳ノート)のカラーマイクロ撮影を実施した。これと併行して文字画像鮮明化のためのシステムの開発に着手し、また簡易な赤外線画像が得られる機器として注目されるデジタルカメラについて、実際の木簡の調査において有効性を確認し、その利用に一定の用途を得た。今後、上記の作業を継続するとともに、木簡積読支援データベースの構築、文字自動認識システム(OCR)の開発を進めていく予定である。

◆東大寺所蔵聖教文書の調査研究

代表者・綾村 宏 基盤研究(A)(1) 継続

東大寺図書館収蔵庫所在の未整理聖教文書の調査研究である。内容的には近世の聖教、文書が大半であるが、古いものでは長治元年の美作国封戸結解状断簡や文安元年の美濃国大井庄石包名年貢切符、薬師寺八幡宮一切経の大般若経などが確認された。目録データは12函分の入力を終え、うち主要な聖教文書の撮影をおこなった。

◆東アジアにおける家畜の起源と伝播に関する動物考古学的研究—特に豚、馬、牛について

代表者・松井 章 基盤研究(A)(1) 新規

本年度は東アジアの共同研究体制をつくるため、ロシア、韓国、台湾、カンボジアの考古学者らと会合を持ち、ブタの起源について共同研究を遂行することで合意した。特に韓国では釜山大学が出版した金海会峴里貝塚の発掘調査報告書に、動物遺存体の

項目を執筆し、1世紀から5世紀にかけての韓国南部における動物利用、特に骨角器製作技術の一端を明らかにすることができた。

◆日中古代墳墓副葬品の比較研究

代表者・花谷 浩 基盤研究(A)(2) 継続

遼西地域の三燕時代の墳墓から出土した馬具・帯金具等の金銅製品について、製作技術の検討と蛍光X線分析をおこなった結果、古墳時代における金銅製品の製作技術が、これらと同一の系譜関係にある見通しが得られた。また、金製装身具の製作技術に、鉄地金銅張技法との関連をうかがわせる技術を確認した。

◆古代中国の石窟・墓室等塑像・壁画の材質・構造調査解析と保存修復に関する研究

代表者・肥塚隆保 基盤研究(A)(2) 継続

古代塑像・壁画の材料と製作技法や年代などに関する調査・研究、劣化とその因子の調査ならびに個々の塑像・壁画に適した保存修復技術の開発をおこなうものである。本年度は、日本国内において鳥取県国府町にある梶山古墳の壁画の分析と保存環境調査、中国共同研究者の招へい、長期暴露試験を継続している顔料の変退色調査をおこない、古代壁画の材質および保存修復に関する有意義な知見を得た。

◆GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総合的研究

代表者・田辺征夫 基盤研究(A)(2) 継続

条坊データの整理と、基礎となる地形データの入力を中心に作業をおこなった。条坊データは、入力されたデータの確認をおこない、いくつかのフォーマットでGISソフトウェアへの導入を試行した。また、地形データの入力の能率化を図るため、ペナデバイスの導入と試行をおこなった。

◆富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究

代表者・松村恵司 基盤研究(B)(2) 継続

4カ年計画の3年目にあたる本年度は、初期貨幣関係文献目録を完成させ、それをもとに文献類の収集と閲覧を続行した。研究史の総括は、江戸時代の初期貨幣研究の流れを整理し、和同開珎を最古の貨幣とする通説の形成過程を明らかにした。また昨年実施した研究集会の記録集「古代の銀と銀

銭をめぐる史的検討」を刊行した。

◆東アジア古代都城の苑地に関する基礎的研究

代表者・金子裕之 基盤研究(B)(2) 継続

大陸的苑地のもと7世紀初頭の推古朝にあり、百済、新羅の影響を受けて平城宮苑地の源流となるが、苑地の要素について大陸や朝鮮半島の要素とともに古来の伝統的要素とを峻別する必要がある。8世紀、東院庭園に初現する「州浜」酷似遺構は5世紀前半代の奈良県果山古墳別区の葺石にあるし、東院庭園の岬や入り江の景石に酷似した意匠は果山古墳や同時代の湧泉遺跡である三重県城の越遺跡にみる。8世紀苑地の骨格は大陸にあり、細部要素に固有の伝統が息づく二重構造の可能性がある。

◆年輪自動計測システムの開発と木質古文化財への応用

代表者・光谷拓実 基盤研究(B)(2) 継続

システム開発の中心となる年輪認識プログラムの作成は、前年度の研究成果であるウェーブレットによる局所的な周波数情報の利用、ならびに層内密度プロファイルの利用を組み合わせることによっておこなった。このシステムは、表面が平滑に研磨された試料や軟X線透過画像などのように、ノイズの少ない良好な年輪画像に対しては所期の目的を十分に果たし得ることが確認された。

古文化財への計測システムの応用研究は、国宝唐招提寺金堂、国宝法隆寺五重塔、国宝宇治上神社本殿・拝殿、国宝平等院鳳凰堂、木彫仏などについておこない、建造物や木彫仏等の年代評価に大きな影響を与える成果を得た。

このように、本研究で新たに導入した画像計測による年輪年代調査方法は、これまで年輪年代測定の対象とはなりえなかったような建造物や木彫仏などの現地調査も可能になったこと、計測の作業効率が向上したこと、パソコン・デジタルカメラ・スキャナなどの汎用機器でも年輪計測が可能になったことなど、年輪年代学の適用範囲の拡大と一般化に大きく結びつく研究となった。

◆古代官衙の造営技術に関する考古学的研究

代表者・山中敏史 基盤研究(B)(2) 新規

本年度は、掘立柱建物遺構と礎石建物遺構の基本的属性について検討し、基部構造、

桁行・梁行の規模、平面構造、平面形式、柱筋、対向側柱位置、妻柱位置、柱掘りかた形状・規模、礎石形状・規模、基壇形状・規模、外周柱穴列(縁・足場穴等)の有無と形状・配置、雨落ち溝、階段など、基準となる項目(データ項目)約120項目を抽出・作成した。そして各項目ごとに、既往の研究成果を収集・整理し、暫定的な型式分類をおこなった。また、これらの属性項目について、データ相関図を作成し、旧来の遺跡データベース構造を見直し、新たなデータベース構造を作成した。

本年度は、上記のデータベース項目にしたがって、主に関東以北の国府・郡衙・城柵遺跡・豪族居宅などの発掘調査成果を中心として建物遺構の資料収集をおこない、約2000レコードのデータベース化を進めた。その資料収集によって、東北城柵地域には特異な建築基部構造や平面構造を採用している建物例が少なくないことが判明している。東北城柵の櫓の造営技術に関する検討にも着手した。

◆文化財資料用携帯型マルチレーザーラマン分光分析装置の基礎的開発研究

代表者・高妻洋成 基盤研究(B)(2) 新規

レーザーラマン分光分析法を文化財資料の非破壊材質分析に適用できる技術を開発し、文化財のラマンスペクトルライブラリーを構築することを目的としている。本年度はこれまで実験室に運び込むことのできなかったもの、発掘直後あるいは発掘現場における遺物などに対しても迅速かつ精度の高い材質分析が可能となる携帯型装置を作製し、基礎データの蓄積と文化財資料のラマンスペクトルの測定をおこなった。

◆東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究

代表者・高瀬要一 基盤研究(B)(2) 継続

4か年計画の最終年度であり、これまでの研究をとりまとめるための国際シンポジウムを開催した。韓国から2名、中国から3名の研究者を招聘し、日本の研究者20余名を加えて二日間にわたり事例発表、研究討議をおこなった。それぞれの国の最新情報を共有し得たこと、地域や国毎の特色や差異を確認できたこと、その上で東アジア地域における庭園文化の伝播や系譜について意見交換できたこと、など大きな成果があった。

◆古代の非鉄金属生産の考古学的研究

代表者・小池伸彦 基盤研究(C)(2) 継続

2003年度は旧備前国、備中国、摂津国ならびに豊前国の産銅関連資料と丹波国の産錫地関連資料、備前国の産銀地関連資料を調査した。そのうち豊前国の精錬・採銅に関連して、福岡県田川郡香春町所在の清祀殿周辺および三ノ岳の踏査を実施、清祀殿隣接地において鉍滓ないし粘土熔融物の散布を確認した。企救郡に関しては、福岡県上清水遺跡出土墨書土器などの考古遺物と地名、伝承などをもとに『日本三代実録』との関連を総合的に検討した。また、埴埴製錬に関しては、和歌山県聖田遺跡例・京都府銭司遺跡例と飛鳥池遺跡出土遺物との比較検討を進めた。このほかに、銅の製錬・精錬・精製に関係する炉についての資料収集・分類をおこない、機能・工程について検討した。

◆遺構計測法の効率化ならびに体系化に関する研究

代表者・小澤 毅 基盤研究(C)(2) 継続

本研究は、近年の測量機器の発達と普及に鑑み、遺構計測法の効率化と体系化を図ろうとするものである。本年度は、現在までの各種計測法の得失を比較する一方、大峰山系でおこなった測量調査の成果をとりまとめて公刊した。また、各地の実態を把握するための資料調査をひきつづいて実施し、遺構計測マニュアルの作成をめざしている。

◆東アジアにおける武器・武具の比較研究—騎兵装備を中心に—

代表者・小林謙一 基盤研究(C)(2) 継続

馬甲・馬冑の出土例が皆無である高句麗については、古墳の石室に描かれた重装騎兵を資料とし、加耶地域の出土例と比較して検討を加えた。中国東北地方、韓半島、日本列島と地域によって重装騎兵の普及に違いがみられる要因としては、時期的な問題だけでなく、戦闘方法や防禦施設の違いが関係する可能性が考えられる。

◆墳墓副葬品から見た古代日韓の地域間交流と社会変化についての研究

代表者・高橋克壽 基盤研究(C)(2) 継続

本研究課題の達成のためには、朝鮮半島三国の各地域の併行関係を確定することが肝要である。そこで、新羅、加耶、百済の中心地域の土器の移り変わりを調べ、日本の副葬品や土器との関係で年代のわかる資料をキーにそれぞれ相対的な年代を付与し、三国の併行関係を確定することができた。この土器編年に基づいて、馬具や装飾大刀などの特殊な製品の展開を地域ごとに対比し、各地での生産や地域間の交流、配布行為などの有無を確かめた。その結果、馬具は4世紀後半以後よく似た鉄製鍔や鏡板が各地でしだいに普遍的に見られるようになるが、日本ではそれがやや遅れて始まること。その後の日本の金銅装馬具は従来、加耶をはじめ朝鮮半島製品との関係が説かれていたが、朝鮮半島とは技術や形態の伝統が異なり、両地域とも基本的に同一のモデルをもちながら6世紀にかけて独自に生産をおこなっている姿が浮き彫りになった。それらのモデルは基本的に中国にあったと考えられる。

◆古代日・韓出土ガラス及び鉛釉陶器の総合的研究

代表者・川越俊一 基盤研究(C)(2) 継続

本年度はガラス製品や施釉陶器などの出土資料について、収集・分析を行い、日・韓両国での共通点と相違点を整理した。その結果、古代日・韓では、共通点としてガラス生産関係遺物の形態的な類似性・硯については施釉率が低いこと・施釉瓦の使用状況に類似性が認められることなど。相違点としては、施釉陶器の器種の異なることなどを明らかにした。

◆データ交換のための遺跡情報構造標準化に関する基礎的研究

代表者・森本 晋 基盤研究(C)(2) 継続

遺跡そのものは情報化される以前の状態であり、遺跡から引き出されたばかりの情報、遺跡に対する観点そのものが強く反映している。この段階の情報はいわば内部資料であったり、当事者の思考の内のものであったりと、情報交換になじむものではない。1段階の整理を経て交換可能な情報とすることが可能である。今年度は、情報発生・記述・整理・報告書記載・データベース作成の各過程での情報構造を検討し、標準化がどこまで追及できるのかについて

分析を進めた。

◆戦国期、織豊期、江戸前・中期における瓦生産の地域別比較研究

代表者・山崎信二 基盤研究(C)(2) 継続

中四国では、高知県・香川県・山口県・広島県・島根県下の織豊期の瓦調査をおこなう。例えば高知県下では天正三年から元和期までに泉州大鳥郡・四天王寺住人などのヘラ書き銘とともに堺環濠都市遺跡・四天王寺出土との同範瓦を発見した。

また分析中であるが、全国の近世瓦を8期に細分・編年し発表した(関西近世考古学研究11号)

◆古墳出現期における土器生産流通体制の研究

代表者・次山 淳 基盤研究(C)(2) 新規

本研究は、古墳出現期に吉備形、讃岐形、東阿波形、河内庄内形、大和庄内形などと呼ばれる特定の胎土と型式学的な特徴を備えた一群の土器について、その生産と流通に焦点をあてて、生産の消長、製作の中心、流通の範囲と規模(流通量)などを探ろうとするものである。また、こうした土器群を包摂する各地域の様式構造のありかたも在来の土器も含めて総括的に検討する。今年度は、研究の対象となる吉備南部、讃岐、阿波、および畿内地域の当該期土器に関わる文献、および資料の収集整理、また実地調査を実施した。特に畿内地域の古式土師器を扱った文献については、成果報告書『畿内古式土師器研究文献目録(稿)』に取りまとめた。

◆東アジアにおける弥生時代タタキ技法波及経路の研究

代表者・深澤芳樹 基盤研究(C)(2) 新規

アジア地域のタタキ技法の検討をとおして、日本列島における弥生土器のタタキ技法の波及経路を特定しようとする試みである。本年度は、日本列島内での土器の観察・研究者との意見交換、日本列島外では韓半島で土器の観察・研究者との意見交換、また中国地域の5世紀以前の文字資料を伴う年代資料を収集した。特に韓半島では、漢陽大学校博物館で古南里貝塚資料、韓国文化財保護財団で巢松里遺跡と竹清里遺跡資料、高麗大学校で寛倉里遺跡資料、公州大学校博物館烏石里遺跡資料を集中的に観察し、松菊里式土器にタタキ技法が確かに用いられていることを確認し、その技

法の特徴を詳細に検討した。さらに大韓民国の多くの研究者と意見交換の場を持ち、検討成果を共有することができた。すなわちタタキ技法を工具、製作工程、身体技法の各面から検討し、韓半島の松菊里式土器のタタキ技法こそが、日本列島に波及して弥生土器のタタキ技法を生んだとの、結論に達するに至った。

◆古代中世文書の機能論的検討に基づく文書行政研究

代表者・吉川 聡 若手研究(B) 継続

本研究は古代から中世にかけて、文書の作成・伝達・保存のあり方とその時代的变化を検討することにより、文書行政、さらには国家・社会の一面をとらえることを目指している。本年度は主に古代・中世の現存文書の検討をおこなった。とくに、律令制文書主義の実態と、それが中世的文書主義にいかに移行するののかについて、理解を深めつつあるところである。

◆古代土器の形態模倣に関する時空間的検討

代表者・金田明大 若手研究(B) 継続

本年度は、西日本における律令期の出土土器資料の収集と、実見をおこなった。資料の収集は中国・四国地方を中心に出土資料を発掘報告書より抽出し、併せて一覧を作成した。

資料の実見は、暗文をもつ土師器を中心に島根、広島、岡山、兵庫の各県の資料を観察し検討をおこなった。

◆弥生・古墳時代における鉄製武器の生産と流通に関する研究

代表者・豊島直博 若手研究(B) 継続

引き続き弥生時代の刀剣について検討し、鉄剣に関する研究成果を論文にまとめることができた。鉄刀と素環刀については、九州の出土例を中心に実測と写真撮影を広くおこなった。鉄刀は把の構造、素環刀は環の製作技法に注目することによって、それぞれ新たな分類と編年を行い、弥生時代と古墳時代を分ける大きな画期を見いだした。

◆東北地方非頁岩産地帯における石器石材の利用に関する研究

代表者・渡辺文彦 若手研究(B) 継続

本研究は、東北地方頁岩産地帯に立地する旧石器時代遺跡と、頁岩を産出しない地域の遺跡（いずれも東山系石刃石器群）とを、選択行為を含めた石材の利用状況という観点から比較検討することを研究の目的とする。今年度は、山形県新庄盆地所在の4遺跡と、石川県辰口町所在の1遺跡の出土資料を測定・分析した。さらに、既に測定・分析を終えている東北地方日本海沿岸地域についてはその研究成果を論文としてまとめた。

◆中世宋様式の導入と伝播に関する研究～北京律僧の活動を中心として～

代表者・箱崎和久 若手研究(B) 継続

多くの入宋僧が禅寺に留学するなか、北京律僧は天台教学や律宗の寺院に身を寄せている。当時、天台教院では、蓮池中に建つ中央の弥陀殿周囲に16の小堂を配して修行をおこなう十六観堂が流行していた。俊苺が創建した泉涌寺の伽藍は、当時盛んだった禅寺と十六観堂の気風を全面に取り入れたものと理解できる。

◆7世紀出土文字史料の研究～書風と全国出土遺構に関する情報収集～

代表者・市 大樹 若手研究(B) 新規

7世紀は日本律令国家が形成される重要な時期にあたる。近年、7世紀の木簡が相次いで出土しており、『日本書紀』『古事記』などの編纂史料ではわからなかった新たな知見が得られつつある。しかし7世紀木簡に書かれた文字は癖の強いものであり、釈読はたいへん困難を極める。そこで本研究では、全国の7世紀木簡に関する情報を広く収集したうえで、書風を中心に検討をおこなうこととした。今年度は、出土して間もない飛鳥・藤原地域の木簡（石神遺跡、藤原宮・京跡、酒船石遺跡など）を中心に整理をおこなった。その成果の一部については、木簡学会の場で口頭報告するとともに、発掘調査機関の概報・紀要や木簡研究などに執筆した。

◆中国古代青銅器の生産と流通に関する基礎的研究

代表者・今井晃樹 若手研究(B) 新規

今年度は海外に所蔵されているコレクション資料の調査をおこなった。9月にニュ

ーヨークメトロポリタンミュージアムとカナダのトロントにあるロイヤルオンタリオミュージアムにて調査を実施した。原寸大実測図の作成と全体・細部とをふくめた写真撮影をおこない、個々の資料の正確な形態と法量を比較できる資料を作成した。そのほか青銅器製作時に使用した土製の鋳型を調査し、その形態、施文方法、組み合わせ方、原材料、焼成方法など鑄造技法を検討した。また、これまで中国で公表されている古代青銅器の出土報告、収蔵品紹介などの文献を集成し、その目録を作成中である。

◆国分寺を中心とした8世紀の瓦生産・流通に関する基礎的研究

代表者・清野孝之 若手研究(B) 新規

東大寺・法華寺出土瓦、唐招提寺所用瓦とその同範瓦、興福寺出土瓦の再検討を主におこなった。国分総寺である東大寺、国分総尼寺である法華寺は近年資料数が増加しており、これらを検討した。この成果の一部として、東大寺転害門・法華寺阿弥陀浄土院出土瓦磚の分析結果を公表した。

唐招提寺金堂創建軒瓦は、平城京内の法華寺、西隆寺、西大寺、薬師寺などのほか、山城高麗寺、丹波国分寺に同範瓦がある。これらをすべて調査し範傷進行や製作技法を検討した結果、唐招提寺の瓦工が丹波へ移動したとする従来の見解に疑問をもつにいたった。この成果は今年度に口頭発表をおこなった。

興福寺創建瓦は紀伊・淡路国分寺に影響を与えたことが知られており、これを検討した。検討過程で、古代の瓦生産・供給体制との比較研究のため、鎌倉時代の興福寺出土瓦についても検討し、いくつかの新たな知見を得た。その成果は既に投稿済みで、平成16年度に掲載される予定である。

◆東アジア圏における歴史的建造物保存・修復理論の比較研究

代表者・清水重敦 若手研究(B) 新規

初年度にあたる今年度は、韓国における歴史的建造物保存修復に調査研究対象を絞り込み、その基礎情報の収集を主課題とした。現地の修理工事視察、文化財庁における文化財保護関係資料収集とヒアリング、日韓都市・建築史ワークショップでの「東アジア木造建造物保存・修復史研究への視座」と題した報告を実施した。

◆古代官衙関係遺跡データベース

代表者・山中敏史 研究成果公開促進費

新規

本データベースの作成は、近年著しく増加している官衙遺跡や官衙と関連するとみられる遺跡、豪族居宅遺跡などの発掘資料のうち、主に建物遺構について、統一的な分類基準に従ってその基礎データを収集・整理・公開することによって、情報を共有化し、研究の深化を図り、また、各地での発掘調査の精度向上、遺構の性格の判断や発掘方法の決定における効率化、遺跡の保護活用に関わる文化財行政の推進に資することを主な目的としたものである。

今年度は、主に関東以北の国府・郡衙・城柵・豪族居宅遺跡・官衙関連遺跡などの発掘調査成果を中心として建物遺構の資料収集をおこない、新たに3400件ほどのデータベース入力を進めた。これには遺跡所在地図・遺構全体図・官衙建物の個別の遺構図なども添付し、テキストデータと照合できるようにした。現在、データ入力の継続とデータの校正、画像データとリンクさせる作業を進めており、今後4年間の内には奈良文化財研究所ホームページなどで公開することを計画している。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2003年7月4～5日に第15回総会および研究会を行った。

7月4日：総会 参加者143名(含委任状)・発表 参加者143名「文化財写真綱領」の宣言(座長：研究会会長；金井杜男)

7月5日：講演 参加者112名「銀塩写真の保存性」(井本昭氏；イメージブレン) 公開講座 参加者124名「遺物撮影私の場合」1日目は近年の文化財写真の動向を鑑みて文化財写真に関する大綱の指針を示した「文化財写真綱領」を研究会でとりまとめて内外に広く発信・宣言した。2日目の「私の場合」は改めて撮影技術の原点に立ち返り、それぞれの遺物撮影に対する悩みや遺物撮影の方法を公開で司会・指導役を奈文研牛嶋茂が担当して実践しながら問題点を共有して発表する場を提供した。(中村一郎)

◆木簡学会研究集会

2003年12月6・7日の両日、第25回木簡学会総会・研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した(参加者155人)。6日は、武内紹人氏(神戸市外国語大学)・館野和己氏(奈良女子大学)「中央アジアのチベット語木簡」、竹内亮氏(奈文研)「具注歴と木簡—石神遺跡出土具注歴木簡をめぐって」の2本の研究報告、7日は、山本崇氏(奈文研)「2003年全国出土の木簡」による木簡出土情報の報告、市大樹氏(奈文研)「石神遺跡第15次調査出土の木簡」、藤沢敦氏(東北大学)「仙台城跡(二の丸北方武家屋敷跡)出土の木簡」、露口真広氏(橿原市教育委員会)「藤原京跡左京一条四坊・二条四坊の調査出土の木簡」の3本の出土事例報告という多彩な内容をめぐって活発な議論を行い、木簡や遺跡についての理解を深めることができた。また、『木簡研究』第25号を刊行した。(渡邊晃宏)



木簡学会研究集会
討論風景

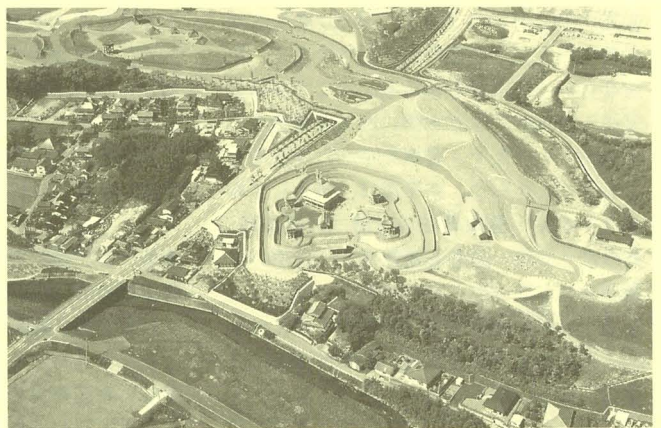
◆日本遺跡学会

2003年2月1日に設立にこぎつけた日本遺跡学会もようやく1年を終え、2004年4月1日現在の会員数は266名におよび、2年目を迎えたところである。手探り状態であった1年目の活動を報告する。

まず、生まれたばかりの学会が何をなすべきか?どのような方向に進むべきか?が大問題である。そこではじめに会員の方々の意見を聞くアンケート調査を実施した。その結果、遺跡の整備・管理・活用の現状に対する関心が高いことが明らかになった。同時に遺跡と都市計画・観光・地域づくり・生涯学習などとの関係など、遺跡にかかわる広範な問題にも高い関心が寄せられ、学会がこれに積極的に取り組むべきとの要望も高かった。アンケート調査によって日本遺跡学会の進むべき方向は見えてきた。

1年目の最も大きな活動は11月に開催した大会である。役員会、総会、特別講演、平城宮第一次大極殿復原現場見学会、懇親会、研究発表会を2日間にわたっておこない、延べ90余名の参加があった。6件の研究発表があり、発表資料集を作成した。また、会員向けのニュースとして会報を2回発行した。その他、学会に求められている遺跡にかかわるさまざまな情報を広く公開する手段としてホームページを立ち上げる作業にも取り組んだ。

2年目からは本格的な活動が要求されるし、またそれに応えていきたいと幹事一同意を新たにしたところである。(高瀬要一)



日本遺跡学会の会報には各地の遺跡整備・活用事例の紹介ページもある。これは第1号に掲載された佐賀県・吉野ヶ里遺跡の全景である。

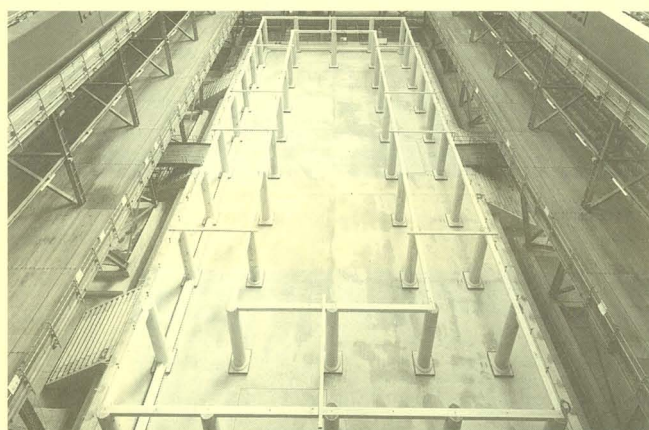
文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

●平城宮跡の整備

特別史跡平城宮跡第一次大極殿復原事業

第一次大極殿復原事業について、昨年度に引き続き、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設部大阪工事事務所に対し、施工・監理業務に関する指導・助言をおこなった。2003年度に発注された工事は、木材調達、加工組立（初重三の肘木まで）、天井彩色などである。

2004年2月29日には、初重の柱22本が立ち「立柱祝賀会」がおこなわれた。



第1次大極殿正殿（初重の柱44本）東から

特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復原整備に関する調査検討業務

第一次大極殿地区の古代建築物の構造・意匠や彩色、金具、瓦などに関する調査・検討を行うとともに、平城宮跡において建物を復原するために必要な資料収集と調査検討および、活用方策のあり方の検討などを目的として、文化庁より受託した業務である。

検討内容は、①木部・屋根・版築の復原研究、②鴟尾・瓦・磚等に関する復原研究、③飾り金具等の復原研究、④彩色に関する復原研究、⑤地盤に関する調査研究、⑥文献から見た大極殿の使われ方の研究、⑦大極殿地区の活用のための調査研究であった。各項目について研究会を開催しながら調査検討を進め、文化庁にその成果報告をおこなった。

①では、中国・韓国における古代建築構造の検討、②鴟尾について1/2模型での検討、③古代金具の事例検討、④古代彩色事例や顔料の検討、⑤軟弱地盤土質確認のための調査仕様の検討、⑥文献に見られる大極殿地区の史料検討、⑦平城宮跡における現状活用状況把握のため、四季それぞれの利用実態調査を実施した。

特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復原整備に関する軟弱地盤等調査検討業務

- (1) 大極殿院地区軟弱地盤調査 大極殿院地区で存在が明らかになった軟弱地盤について、その範囲や深さの状況等の資料を得るために表面波探査、電気探査、地中レーダー探査、重力探査をおこなった。
- (2) 平城宮跡出土瓦の理化学的分析 大極殿及び院地区の復原に際し使用する瓦について、復原に必要な数値的条件を把握するための分析をおこなった。

●キトラ古墳の予備調査

2003年8月、キトラ古墳仮設保護覆屋が完成した。100%近い湿度と地温に連動した気温を保持することができ、石室の環境を維持しつつ調査がおこなえる施設である。当初、秋以降に墓道未掘部分の調査を開始するはずだったが、墳丘のカビ処理や観測機器の設置などに時間がかかったため、2004年1月末に調査を再開した。調査は、古墳の墳丘南側にかぶるように設置された「小前室」内部でおこなった。

発掘調査は、まず、盗掘坑の完掘をめざした。盗掘坑は、上幅約2m、底幅0.3mの細長いもので、石室天井石の西辺から石室南側にかけて掘削されていた。底には、盗掘時に破壊された石室の溶結凝灰岩製石材断片が堆積し、それに混じって、漆片や金銅製品細片が出土した。

墓道部は、前年度に掘り残した長さ約1.5m分を調査した。盗掘によって、墓道西壁はかなり損壊をうけていたが、破壊が床面にまではおよんでいなかったため、そこでの遺構の遺存状態は良好だった。床面で、コロのレール痕跡（道板痕跡）4条と穴2個を確認した。穴は柱穴と思われ、コロのレールを抜いて埋め戻した後に掘削されていた。墓道は、2002年調査分と合わせ、総延長3.6mを調査したことになる。石室との取りつき部分での幅は2m。西壁は、石室の手前1.2mのところ

鉤の手に屈折する。

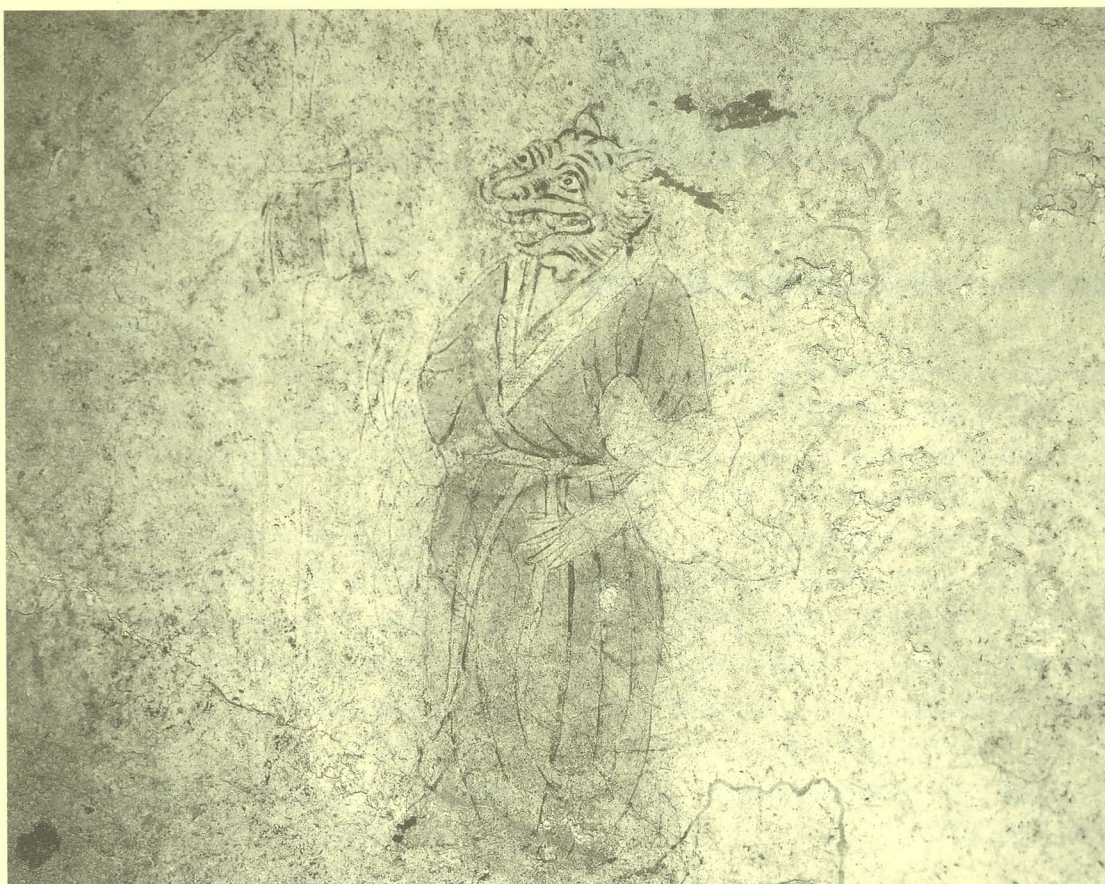
墓道をほぼ完掘したので、石室の前面の状況がわかるようになった。閉塞石、南端の天井石、東西の側壁の小口、底石の南端部を確認できた。各石材の加工手法の細部は、高松塚古墳と違っている。石室の内法は2.4×1.04m、石室総高1.82mある。石材のすべての合わせ目に漆喰が塗り込んであった。

閉塞石の左上を破壊して盗掘しており、上下65cm、上幅40cm、下幅25cmの孔があく。天井石や西側壁石にも削られた痕跡（刃幅約5cm）があった。

今年度の調査で、石室外側の発掘はほぼ終了した。終末期古墳の墓道を完掘できたのは初めてのことである。また、盗掘孔を通して石室内部の壁画の現況を観察することができるようになったが、壁面の漆喰は予想以上に危機的状態にある。今後の保存修復に向けた準備作業として、壁画の写真撮影（銀塩・デジタル・赤外線）とフォトマップ用撮影をおこない、十二支像の寅と子を確定するなど、大きな成果が上がっている。今後とも、文化庁や東文研など関係機関と密接な連携を保ちながら、慎重に調査をおこなっていきたい。



キトラ古墳墓道



キトラ古墳壁画の十二支寅像

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当専門職員の資質向上を目的とする研修を実施している。今年度は、一般研修1課程、専門研修8課程、特別研修5課程の合計14課程の研修を開催した。研修総日数165日、研修生総数245名であった。

また、埋蔵文化財センターおよび各研究部では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査・遺物の保存・遺跡の保存・遺跡整備等に対する指導・助言等の協力をおこなっている。今年度の主なものの一覧を別表に掲げた。

このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査、動物遺存体の同定、年輪年代測定、遺物の保存処理・分析等の受託研究もおこなった。主なものを別表に掲げる。

京都大学大学院の教育

連携教育を行っている京都大学大学院人間・環境学研究科では、教育研究理念をより高度なレベルで達成するため平成15年4月に大幅な改組をおこなった。

奈良文化財研究所の教官は、共生文明学専攻－文化環境学系学部－文化・地域環境論講座－文化遺産学分

野に属し、文化財調査法論1・2(田辺征夫・山中敏史・小野健吉)、環境考古学論1・2(光谷拓実・肥塚隆保・松井章)、文化遺産学演習1(田辺征夫・山中敏史・小野健吉)、文化遺産学演習2(光谷拓実・肥塚隆保・松井章)の各講義、演習、実習を京都大学および奈良文化財研究所の各教官研究室でおこなった。このほか、講座リレー講義の文化・地域環境基礎論を分担した(今年度担当は田辺征夫)。

奈良女子大学大学院の教育

奈良文化財研究所が奈良女子大学と連携している大学院教育では、3名の併任教官が人間文化研究科(博士後期課程)比較文化学専攻文化史論講座の3教科を受け持っている。

歴史考古学特論(花谷 浩)、宗教考古学特論(金子裕之)、歴史資料論(渡邊晃宏)であり、歴史考古学は6・7世紀の寺院や瓦磚の諸問題、宗教考古学では律令的祭祀の諸問題、歴史資料論は木簡の諸問題を扱った。これらはいずれも飛鳥藤原京、平城京における貴重な発掘品を前に行う授業であり、他に例をみない。奈良文研ならではの“贅沢な教育”、といえよう。04年度からは奈良女子大学の独立行政法人化を受けて体制の見直しがあり、教官の併任は客員となるが、講座内容の変更はない。

2003年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧 (委員の委嘱を受けているもの)

(北海道) 標津遺跡群天然記念物標津湿原 入江・高砂貝塚	(京都) 恭仁宮跡 仁和寺 井手内遺跡 平等院 銚子山古墳 尼門跡寺院	(岡山) 鬼城山 万富東大寺瓦窯跡 津山市景観整備 備中松山城跡 寒風古窯跡群 津島遺跡 彦崎貝塚
(青森) 三内丸山遺跡 是川縄文の里	(大阪) 堺市史跡土塔 今城塚古墳 關鷄山古墳 高井田横穴線刻壁画 千早城跡・楠木城跡・	(山口) 大内氏遺跡 下関市史跡
(岩手) 志波城跡 平泉遺跡群	赤阪城跡 日本民家集落博物館	(徳島) 阿波国分尼寺跡 脇町市街地景観整備
(宮城) 多賀城跡 里浜貝塚 亘理町三十三間堂官衙遺跡	(兵庫) 落地飯坂遺跡 赤穂城跡 篠山城跡	(香川) 宗吉瓦窯跡 丸亀城跡 快天山古墳
(栃木) 下野国分寺跡	(奈良) 酒船石遺跡 大乘院庭園 藤ノ木古墳 橿原市伝統的建造物群保存地区	(愛媛) 来住庵寺跡 宇和島城跡 道後温泉本館
(茨城) 結城庵寺跡	唐古・鍵遺跡	(福岡) 大宰府史跡 下高橋官衙遺跡 旧三奈木黒田家庭園
(新潟) 佐渡金山遺跡	(和歌山) 根来寺 養蚕園	(佐賀) 肥前国府跡 名護屋城跡並びに陣跡 天狗谷窯跡
(福井) 国古城跡 王山古墳群・兜山古墳 後瀬山城跡	(鳥取) 青谷上寺地遺跡 妻木晩田遺跡 鳥取県近代和風建築	(長崎) 原の辻遺跡 矢立山古墳
(岐阜) 長塚古墳	(島根) 石見銀山遺跡 西谷墳墓群 田和山遺跡 松江城	(宮崎) 生目古墳群
(静岡) 新居閼跡 登呂遺跡	(広島) 安芸国分寺跡	
(愛知) 小長曾陶器窯跡 正法寺古墳		
(三重) 上野城跡		
(滋賀) 近江国庁跡 安土城跡		

2003年度 埋蔵文化財発掘技術者等研修課程一覧

区分	課 程	実施期日	定員	対 象	内 容	担 当 室	研修日数	申込者数	受講者数
一般 研 修	一般課程	2003年 6月10日 ～ 7月18日	18名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	遺跡の発掘調査を進めるために必要な基礎的知識と技術の研修	文化財情報研究室	39日	18名	17名
専 門 研 修	写真基礎課程	2003年 5月7日 ～ 5月15日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な基礎的知識と技術の研修	写真資料調査室	9日	11名	11名
	保存科学課程	2003年 5月21日 ～ 6月5日	16名	〃	遺物、遺構の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修	保存修復科学研究室	16日	7名	7名
	文化財写真課程	2003年 8月19日 ～ 9月12日	12名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	写真資料調査室	25日	7名	7名
	古代集落 遺跡調査課程	2003年 10月1日 ～ 10月10日	16名	〃	古代集落遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺物調査技術研究室	10日	13名	13名
	遺跡環境調査課程	2003年 10月16日 ～ 10月31日	16名	〃	遺跡の発掘において、第四紀学の成果を用いて過去の自然環境を推定復原する方法を学ぶ研修	古環境研究室	16日	12名	12名
	官衙遺跡調査課程	2003年 11月27日 ～ 12月9日	16名	〃	官衙遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺物調査技術研究室	13日	13名	13名
	報告書作成課程	2004年 1月14日 ～ 1月23日	24名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	文化財情報研究室	10日	29名	29名
	城郭遺跡調査課程	2004年 1月28日 ～ 2月4日	16名	〃	城郭遺跡の調査・修復に必要な専門的知識と技術の研修	保存修復工学研究室	8日	34名	33名
特 別 研 修	科学分析調査課程	2003年 9月17日 ～ 9月19日	20名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、一般研修修了者又はそれと同程度の経験を有する者	埋蔵文化財資料の科学分析に関する原理とその利用技術および解釈、最近の動向などに関する基礎的知識の研修	保存修復科学研究室	3日	17名	17名
	遺跡地図情報課程	2003年 11月11日 ～ 11月14日	24名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	25名	24名
	自然科学的 年代決定法課程	2004年 2月17日 ～ 2月20日	20名	〃	自然科学的手法による年代測定に関する基礎的知識の研修	古環境研究室	4日	11名	11名
	陶磁器調査課程	2004年 2月24日 ～ 2月27日	16名	〃	近世遺跡出土日本陶磁器の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	国際遺跡研究室	4日	40名	40名
	動物考古学課程	2004年 3月2日 ～ 3月5日	16名	〃	遺跡出土の動物依存体研究に関して必要な専門的知識と同定技術の習得をねらう研修	古環境研究室	4日	11名	11名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展示「ASUKA 1/500 - 「飛鳥・藤原京展」帰還展-」

2003年4月22日～6月1日

奈良文化財研究所では平成14年度に創立50周年を記念して、「飛鳥・藤原京展」を大阪・東京・宮城・三重の4カ所で開催した。当館では当該展覧会の終了を記念して、展覧会のために作成した復元模型を中心とした展覧会を春期特別展示としておこなった。

展覧会の表題ともなった1/500は、展示の中心となった飛鳥地域の500分の1の復元模型のことである。模型は藤原京の南辺から飛鳥京の南辺までを含む復元模型で、最近の発掘成果を含めた、当時の景観を具体的に知ることができる。

この他、山田寺に関連する模型も2点展示した。一つは山田寺金堂の屋根の復元模型である。山田寺の発掘調査では各堂塔によって葺かれていた瓦の形式が異なることが明らかになっている。金堂の軒先を復元して、当時の瓦葺きの様子を再現した。また調査では金堂の前に置かれていた灯籠の蓮華座部分が出土し、上部の破片もいくつか発見された。それらを組み合わせで灯籠の復元模型を作り展示した。

復元模型を中心としたこの展示を通して、飛鳥時代の様子をより具体的に理解して頂く契機としたい。

◆秋期特別展示「古年輪」

2003年10月7日～11月24日

近年考古学の研究には関連する諸科学の成果が大きく取り入れられるようになってきている。特に年代決定の分野では、年輪年代学や炭素同位体法の新しい測定方法などがもたらす年代に大きな注目が集まっている。

今回秋期特別展として、年輪年代学をとり上げた。年輪年代学は当初欧米の針葉樹を用いた研究で確立された年代決定法である。1年ごとに生成する年輪を指標として、遺跡出土木製品の年輪からその木製品の年代を決め、遺跡の年代を考えようとする方法である。近年にいたって、日本でも標準年輪パターンが確立され年輪年代学が多くの成果を上げてきている。今回の展示では、まず年輪年代学の方法を理解して頂くために、標準年輪パターンを現在わかっているところまで

グラフで展示した。

さらにこの方法による年代決定で注目を浴びたいいくつかの測定例をとり上げた。まずこの方法での年代決定が世に認められるきっかけになった信楽町の宮町遺跡出土柱根を展示した。この柱根の測定で743年との測定結果がで、宮町遺跡が紫香樂宮であることが明らかになるとともに、年輪年代学の正確さが証明されることになった。

この他、展示では奈良時代にさかのぼることが証明された唐招提寺の邪鬼、飛鳥寺の部材が運ばれていたことがわかった元興寺の部材など、主に建築部材を中心に、年輪年代学が大きな成果をもたらしたいくつかの例を展示した。

平城宮跡資料館の展示

◆奈良の都を掘る－発掘速報展平城2003－

2003年11月1日～11月21日

この展示は、平城宮跡発掘調査部が、主として2002年度に実施した平城宮および平城京内の発掘調査成果を速報展示したものである。

平城宮では、第一次大極殿院築地回廊の細部構造(平城第360次)、東区朝集殿院東南部の掘立柱塀から築地への変遷(同346・355次)など、宮中枢部の最新の調査成果を紹介した。

平城京内では、寺院の調査が主となり、興福寺中金堂院回廊の時期変遷(同347次)、一乗院の「泉水」(同350・351次)、大乘院園池(同352次)の作庭技法の細部、西大寺四王堂の瓦積基壇(同342次)など遺跡の多様な調査成果を展示した。

出土遺物では、興福寺の創建以来の多種にわたる軒瓦、一乗院出土の天秤棒をかつぐ人物を描いた土器、法華寺旧境内出土の三彩の瓦・陶器(同357次)、これまでに確認された平城宮出土の難波津の歌を墨書した土器の全点展示などに観覧者の関心が集った。

このほか、2000年に寄贈をうけた関野貞資料から、明治年間の平城宮の貴重な測量図を展示し、発掘調査以前の平城宮の姿をしのんでいただけた。

以上のように、この速報展では、現地説明会以後の成果を盛り込んで紹介するとともに、平城宮・京に関連する多様な調査研究の成果の紹介にも努めた。

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れる来訪者等に平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から開始した。

2004年4月1日現在126名(I期生55名、II期生24名、III期生47名)の解説ボランティアが登録、1日7～10名が休館日を除く毎日、平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園、朱雀門、大極殿工事現場の公開施設を拠点に活動している。

2003年度は、延べ7万4千有余名を解説、各人概ね月2～3日の活動状況である。

この解説ボランティア事業は、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミ、奈良県、奈良市のHP、観光情報誌等にも何度も採り上げられ、来訪者からお礼の手紙が寄せられている。また、平城宮跡での熟達した高度な文化解説は、好評を得ており、ボランティアの熱心な学習意欲と熱意により、「ボランティア通信」などを作成している。

研究所としては、解説ボランティア活動を積極的に支援するため活動着の配布、研究所員を交えた意見交換会を実施、さらに研修会、学習会及び、遺跡見学会を実施、解説資料や刊行物の提供をしている。

図書資料・データベースの公開

本研究所図書資料室では、遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書約23万冊、逐次刊行物約7,000タイトル、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真約77万点を所蔵している。2003年度は、新たに図書約1万2千冊、写真約2万点の受入をおこなった。

一般の利用者へは、一般公開施設として図書資料室を公開し、所蔵資料について閲覧等の利用が可能となっている。さらに所蔵図書データベースがインターネット経由で検索可能となっており、所外からの利用者に対する図書資料室利用の推進を図っている。

本研究所では、文化財情報の電子化をおこなうとともに公開用の文化財関係データベースについて、データの更新ならびに追加入力をおこない、データの充実を継続的に実施している。

2003年度には、インターネット経由で公開している木簡データベース等について内容の充実をおこなった。

2003年度 平城宮跡解説ボランティア活動状況

年 月	ボランティア 活動者数	解 説 の べ 人 数			計
		団 体		個 人	
		学 生	一 般		
2003年 4月	260	2,631	349	3,841	6,821
5月	290	10,408	1,140	4,599	16,147
6月	267	1,466	1,255	3,571	6,292
7月	265	194	175	3,063	3,432
8月	247	122	493	3,866	4,481
9月	248	407	622	2,767	3,796
10月	253	3,813	996	4,109	8,918
11月	255	1,607	2,808	3,796	8,211
12月	239	214	1,055	2,320	3,589
1月	242	40	1,185	2,144	3,369
2月	243	581	817	2,830	4,228
2004年 3月	240	346	1,175	3,403	4,924
計	3,049	21,829	12,070	40,309	74,208

4 その他

刊行物・データベース等

奈良文化財研究所学報

- 第1冊 仏師運慶の研究(1954)
 第2冊 修学院離宮の復原的研究(1954)
 第3冊 文化史論叢(1955)
 第4冊 奈良時代僧房の研究(1956)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告(1957)
 第6冊 中世庭園文化史(1958)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告(1958)
 第8冊 文化財論叢Ⅰ(1959)
 第9冊 川原寺発掘調査報告(1959)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告(1960)
 第11冊 院の御所と御堂-院家建築の研究-(1961)
 第12冊 巧匠阿弥陀仏快慶(1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察(1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究(1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査(1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査(1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査(1965)
 第18冊 小堀遠州の作事(1965)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家(1967)
 第20冊 名物烈の成立(1969)
 第21冊 研究論集Ⅰ(1971)
 第22冊 研究論集Ⅱ(1973)
 第23冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ 平城京左京一条三坊の調査(1974)
 第24冊 高山-町並調査報告-(1974)
 第25冊 平城京左京三条二坊(1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ(1975)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ(1975)
 第28冊 研究論集Ⅲ(1975)
 第29冊 木曾奈良井-町並調査報告-(1975)
 第30冊 五條-町並調査の記録-(1976)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ(1977)
 第32冊 研究論集Ⅳ(1977)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告(1977)
 第34冊 平城宮発掘調査報告Ⅸ(1977)
 第35冊 研究論集Ⅴ(1978)
 第36冊 平城宮整備調査報告Ⅰ(1978)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ(1979)
 第38冊 研究論集Ⅵ(1979)
 第39冊 平城宮発掘調査報告Ⅹ(1980)
 第40冊 平城宮発掘調査報告Ⅺ(1981)
 第41冊 研究論集Ⅶ(1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告Ⅻ(1984)
 第43冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展(1984)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(1985)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告(1986)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書(1988)
 第47冊 研究論集Ⅷ(1988)
 第48冊 年輪に歴史を読む-日本における古年輪学の成立-(1990)
 第49冊 研究論集Ⅸ(1990)
 第50冊 平城宮発掘調査報告書ⅩⅢ(1990)
 第51冊 平城宮発掘調査報告書ⅩⅣ(1992)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書(1992)
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究(1993)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊-長屋王邸・藤原麻呂邸-発掘調査報告(1994)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ
 -飛鳥水落遺跡の調査-(1994)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告(1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡(1998)
 第58冊 研究論集Ⅹ(1999)
 第59冊 中世瓦の研究(1999)
 第60冊 研究論集Ⅺ(1999)
 第61冊 研究論集Ⅻ(2000)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告(2000)
 第63冊 山田寺発掘調査報告(2001)
 第64冊 研究論集ⅩⅢ(2001)
 第65冊 文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究所創立五十周年
 記念論文集(2002)
 第66冊 研究論集ⅩⅣ(2002)
 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告 旧石器
 時代編[法華寺南遺跡](2002)
 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告 百濟大寺跡の調査(2002)
 第69冊 平城宮発掘調査報告ⅩⅤ(2002)

奈良文化財研究所史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)(1954)
 第2冊 西大寺叡尊伝記集成(1955)
 第3冊 仁和寺史料 寺誌編1(1963)
 第4冊 俊乗坊重源史料集成(1964)
 第5冊 平城宮木簡1 図版(1966)
 第6冊 仁和寺史料 寺誌編2(1967)
 第5冊 平城宮木簡1 解説(別冊)(1969)
 第7冊 唐招提寺史料 I (1970)
 第8冊 平城宮木簡2 図版・解説(1974)
 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録 I (1974)
 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録 II (1975)
 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録 III (1976)
 第12冊 藤原宮木簡1 図版・解説(1977)
 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV (1977)
 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録 V (1978)
 第15冊 東大寺文書目録第1巻(1978)
 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録 VI (1979)
 第17冊 平城宮木簡3 図版・解説(1979)
 第18冊 藤原宮木簡2 図版・解説(1979)
 第19冊 東大寺文書目録第2巻(1979)
 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録 VII (1980)
 第21冊 東大寺文書目録第3巻(1980)
 第22冊 七大寺巡礼私記(1981)
 第23冊 東大寺文書目録第4巻(1981)
 第24冊 東大寺文書目録第5巻(1982)
 第25冊 平城宮出土墨書土器集成 I (1982)
 第26冊 東大寺文書目録第6巻(1983)
 第27冊 木器集成図録-近畿古代編-(1984)
 第28冊 平城宮木簡4 図版・解説(1985)
 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻(1985)
 第30冊 山内清男考古資料 I (1988)
 第31冊 平城宮出土墨書土器集成 II (1988)
 第32冊 山内清男考古資料2(1989)
 第33冊 山内清男考古資料3(1991)
 第34冊 山内清男考古資料4(1991)
 第35冊 山内清男考古資料5(1991)
 第36冊 木器集成図録-近畿原始編-(1992)
 第37冊 梵鐘実測図集成(上)(1992)
 第38冊 梵鐘実測図集成(下)(1993)
 第39冊 山内清男考古資料6(1993)
 第40冊 山田寺出土建築部材集成(1994)
 第41冊 平城京木簡1(1994)
 第42冊 平城宮木簡5(1995)
 第43冊 山内清男考古資料7(1995)
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻(1995)
 第45冊 北浦定政関係資料(1996)
 第46冊 山内清男考古資料8(1996)
 第47冊 北魏洛陽永寧寺(1997)
 第48冊 発掘庭園資料(1997)
 第49冊 山内清男考古資料9(1997)
 第50冊 山内清男考古資料10(1998)
 第51冊 山内清男考古資料11(1999)
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法(1999)
 第53冊 平城京木簡2 長屋王家木簡2(2000)
 第54冊 山内清男考古資料12(2000)
 第55冊 法隆寺古絵図集(2001)
 第56冊 法隆寺考古資料(2001)
 第57冊 日中古代都城図録(2002)
 第58冊 山内清男考古資料13(2002)
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成 III (2002)
 第60冊 平城京条坊総合地図(2002)
 第61冊 鞆義黄冶唐三彩(2002)
 第62冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉一(2002)
 第63冊 平城宮木簡6(2003)
 第64冊 平城京出土古代官銭集成 I (2003)
 第65冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉二(2003)
 第66冊 山内清男考古資料14(2003)
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻(2003)
 第68冊 古代東アジアの金属製容器 I 中国編(2003)

奈良文化財研究所基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説(1973)
 第2冊 瓦編2 解説(1974)
 第3冊 瓦編3 解説(1975)
 第4冊 瓦編4 解説(1976)
 第5冊 瓦編5 解説(1976)
 第6冊 瓦編6 解説(1978)
 第7冊 瓦編7 解説(1979)
 第8冊 瓦編8 解説(1980)
 第9冊 瓦編9 解説(1983)

飛鳥資料館図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇(1976)
 第3冊 日本古代の墓誌(1977)

- 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇(1978)
 第5冊 古代の誕生仏(1978)
 第6冊 飛鳥時代の古墳-高松塚とその周辺-(1979)
 第7冊 日本古代の鴟尾(1980)
 第8冊 山田寺展(1981)
 第9冊 高松塚拾年(1982)
 第10冊 渡来人の寺-桧隈寺と坂田寺-(1983)
 第11冊 飛鳥の水時計(1983)
 第12冊 小建築の世界-埴輪から瓦塔まで-(1983)
 第13冊 藤原-半世紀にわたる調査と研究-(1984)
 第14冊 日本と韓国の塑像(1985)
 第15冊 飛鳥寺(1985)
 第16冊 飛鳥の石造物(1986)
 第17冊 萬葉乃衣食住(1987)
 第18冊 壬申の乱(1987)
 第19冊 古墳を科学する(1988)
 第20冊 聖徳太子の世界(1988)
 第21冊 仏舎利埋蔵(1989)
 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
 第23冊 日本書紀を掘る(1990)
 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
 第25冊 飛鳥の源流(1991)
 第26冊 飛鳥の工房(1992)
 第27冊 古代の形(1994)
 第28冊 蘇我三代(1995)
 第29冊 斉明紀(1996)
 第30冊 遺跡を測る(1997)
 第31冊 それからの飛鳥(1998)
 第32冊 UTAMAKURA(1998)
 第33冊 幻のおおでら-百濟大寺(1998)
 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として(1999)
 第35冊 あすかの石造物(1999)
 第36冊 飛鳥池遺跡(2000)
 第37冊 遺跡を探る(2001)
 第38冊 あすかー以前(2002)
 第39冊 AOの記憶(2002)
 第40冊 古年輪(2003)

飛鳥資料館カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道(1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1-最近の出土品(1975)
 第3冊 飛鳥の仏像(1978)
 第4冊 桜井の仏像(1979)

- 第5冊 高取の仏像(1980)
 第6冊 檀原の仏像(1981)
 第7冊 飛鳥の王陵(1982)
 第8冊 大官大寺-飛鳥最大の寺-(1985)
 第9冊 高松塚の新研究(1992)
 第10冊 飛鳥の一と-最近の調査から-(1994)
 第11冊 山田寺(1997)
 第12冊 山田寺東回廊再現(1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ(2001)

その他の刊行物(2003年度)

- 奈良文化財研究所紀要2003
 奈文研ニュースNo.9、No.10、No.11、No.12
 埋蔵文化財ニュース114(全国木簡出土遺跡・報告書綜覧)
 埋蔵文化財ニュース115(環境考古学4 牛馬骨格図譜)
 埋蔵文化財ニュース116(年輪年代法と最新画像-古建築・木彫仏・木作品への応用-)
 埋蔵文化財ニュース117(2002年度埋蔵文化財関係統計資料)
 古代庭園に関する調査研究-飛鳥時代庭園遺構の検討-(平成14年度報告書)
 古代の陶硯をめぐる諸問題
 平城宮第一次大極殿復原研究 第2回瓦研究会記録
 平城宮第一次大極殿復原研究 第4回瓦研究会記録
 古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編
 長谷寺本堂調査報告書
 徳利屋家住宅調査報告書(奈良文化財研究所編集)
 加納屋深澤家住宅調査報告書(奈良文化財研究所編集)
 旧片山家住宅調査報告書(奈良文化財研究所編集)
 奈良の都を掘る -発掘速報展 平城2003-
 重要文化財指定記念展-平城宮跡大膳職推定地出土木簡・北浦定政関係資料-
 研究図録 対馬の鏡(東アジア金属工芸史の研究5)
 研究図録 新羅鐘・高麗鐘拓本実測図集成(東アジア金属工芸史の研究6)
 平城宮発掘調査出土木簡概報(37)
 飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(17)
 国宝・重要文化財建造物保存図目録
 重要文化財建造物現状変更説明(1986~1988)本文編
 重要文化財建造物現状変更説明(1986~1988)図版編
 重要文化財建造物現状変更説明(1983~1985)本文編
 重要文化財建造物現状変更説明(1983~1985)図版編
 国宝・重要文化財建造物写真乾板目録Ⅰ
 三燕文物精粹(日本語版)
 川原寺寺域北限の調査
 -飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告書-

図書・写真資料 (2004年3月31日現在)

図書：230,680冊

単位：冊

区分	種別	購入	寄贈	計
2003年度	和漢書	2,560	8,530	11,090
	洋書	51	362	413
累計	和漢書	71,536	149,153	220,689
	洋書	6,507	3,484	9,991

写真：775,344点

データベース一覧

木簡データベース

遺跡データベース

古代・地方官衙・居宅・寺院関係遺跡文献データベース

発掘庭園データベース(和文・英文)

所蔵図書データベース

薬師寺典籍文書データベース

報告書抄録データベース

墨書土器集成図録データベース

人事異動 (2003.4.1~2004.3.31)

● 2003年4月1日付け

埋蔵文化財センター長	田辺 征夫
協力調整官	毛利光俊彦
平城宮跡発掘調査部長	岡村 道雄
平城宮跡発掘調査部写真資料調査室長併任	
飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	金子 裕之
管理部管理課課長補佐	長谷川 功
管理部管理課専門職員	松本 正典
飛鳥藤原宮跡発掘調査部併任	
管理部管理課用度係長	牧野 弘之
管理部業務課研修・事業係長	吉田 善弘
管理部文化財情報課専門職員	車井 俊也
飛鳥資料館併任	
管理部管理課会計係主任	石田 勇
管理部業務課施設係主任	上垣内茂樹
平城宮跡発掘調査部考古第三調査室長	深澤 芳樹
平城宮跡発掘調査部遺構調査室長	島田 敏男
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室長	山崎 信二
埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室長	山中 敏史

埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長	松井 章
平城宮跡発掘調査部遺構調査室	大林 潤
埋蔵文化財センター古環境研究室	大河内隆之
埋蔵文化財センター保存修復科学研究室	降幡 順子
文化庁文化財部建造物課文化財調査官	長尾 充
京都大学経理部経理課課長補佐	關 一
京都大学経理部経理課第二支出掛長	木村 健次
大阪大学基礎工学部等会計掛	田仲 裕一

● 2003年8月1日付け

管理部業務課課長補佐	鹿田 三郎
国立民族学博物館管理部会計課課長補佐	大塚 真琴

● 2003年9月30日付け

辞職	櫻井 雅樹
----	-------

● 2003年10月1日付け

埋蔵文化財センター保存修復工学研究室長	小野 健吉
文化遺産研究部遺跡研究室	中島 義晴

● 2003年12月1日付け

管理部管理課用度係主任	江川 正
-------------	------

● 2003年12月31日付け

辞職	岩本 圭輔
----	-------

● 2004年1月1日付け

飛鳥資料館学芸室長	杉山 洋
平城宮跡発掘調査部遺構調査室	清永 洋平

● 2004年3月1日付け

文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官	小野 健吉
---------------------	-------

● 2004年3月31日付け

東京芸術大学大学院美術研究科教授	清水 真一
------------------	-------

■ 2003年7月2日

埋蔵文化財センター保存修復工学研究室長	松本 修自
(公務外死亡)	

予算等

予算(予定額)

単位:千円

	2003年度	(参考)2004年度
文部科学省からの運営費交付金(人件費を除く)	1,177,304	1,144,722
自己収入(入場料等)予定額	14,106	14,247
計	1,191,410	1,158,969

土地と建物

単位:m²

	土地	建物(建面積/延面積)	建築年
本館地区	8,860	2754.25/6754.86	1964年ほか
平城宮跡資料館地区	※	10630.53 / 16149.67	1970年ほか
飛鳥藤原宮跡発掘調査部地区	20,515	5533.23 / 8006.96	1988年ほか
飛鳥資料館地区	17,093	2353.84 / 4381.30	1974年ほか

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金(2004年4月30日現在)

単位:千円

研究種目	2003年度		(参考)2004年度	
	件数	金額	件数	金額
特定領域研究	2	23,800	3	17,700
基盤研究(S)	1	15,470	1	22,490
基盤研究(A)	5	53,820	6	48,360
基盤研究(B)	6	23,900	3	8,200
基盤研究(C)	9	7,000	7	6,000
若手研究(A)	—	—	1	30,160
若手研究(B)	9	8,500	10	9,000
研究成果公開促進費	1	3,500	—	—

職員一覧 (独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所)

